ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第 64 号

徐州で出土した前漢前期の人物画像鏡について----------李 銀 徳・孟 強 訳：黄 暁 芬-----1

平成９年度の発掘調査事業予定----------水谷 壽克-----9

平成８年度京都府埋蔵文化財の調査----------伊野 近富----12

平安京跡の発掘調査----------竹下 士郎----19

－平成８年度発掘調査略報－----------23

17. 中海道遺跡第42次(3NNKAN-42)

18. 長岡京跡左京第385次(7ANVKN-9・10)

19. 長岡京跡右京第547次(7ANGTE-3・GKN-2)

20. 菟道遺跡・西隼上り遺跡

21. 西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡

誌上遺物展示　1. 京都府丹後町高山12号墳出土双龍環頭大刀----------33

府内遺跡紹介　78. 五塚原古墳----------35

長岡京跡調査だより・61----------38

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織及び職員一覧----------41

センターの動向----------42

受贈図書一覧----------44

1997年 6月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版　徐州で出土した前漢前期の人物画像鏡について

徐州博物館提供

徐州で出土した前漢前期の人物画像鏡について

李　銀　徳・孟　　強
訳：黄　暁　芬

1994年４月、徐州市北郊外で前漢宛朐侯劉執墓より前漢前期の人物画像鏡が出土した。(注1)

この鏡(Ｍ３：67)は被葬者劉執の腰部右下に副葬され、出土当時には10余点に割れていたが、幸い破片が揃っていて完全に復元することができた。直径18.5cm、縁高0.85cm、中央部は薄くわずか0.15cmである(第１図)。鋳上がりは精良で、表面はみな酸化保護膜で覆われ、錆がほとんど出ていない。出土した鏡に少し手を加えて処理すると、十分きれいになる。

当鏡の鈕は龍・亀の合体造形で割合複雑な形状である。鈕の身を背中が半円の甲羅形を呈する亀形に作り、四本足は前後の外側へと伸ばして、足指の爪は、はっきり表現されている。尻尾は右側に曲げられている。首が龍首の形を呈し、左側より後ろに曲げて亀の背中に付く。龍首には大きく開いた口や丸い目、また頸部に鱗が鮮明に表現されている。

鈕座は円形で、直径4.5cm、その外周に走ってる四匹の虺龍がある。首を上げ、口を大きく開いて丸い目をしている。龍の体は３本線で示す。前の２本足を高く挙げ、前右足を曲げ、後右足には３本の指爪を有する。左足は２本線で表現し、曲げて後ろへ伸ばしており、指爪が２本ある。長い尾は後ろへはね上げている。四匹の龍の造形は完全に一致する。鈕座の外周には一回りの地紋があり、組ごとに直線と点線を混ぜながら、竪と横を斜めに交叉するもので、非常に規格的かつ細密である。地紋の外周に幅広の素文帯がある。また、主文様と鏡の縁の間にも同様の滑らかな幅広の素文帯がある。

鏡の主文様は幅が3.5cm、主題は人物画像である。各像の間は地紋ですべて埋められ、地紋の表現手法は鈕座の外周の地紋と一致する。画像は４区に分かれ、鈕座の龍首方向に置かれた一組の画像を初めとし、各区画を不規則の菱形文様(樹葉文にも相似する)と博山文様によって区切られる。

人物画像は区画ごとに上下２段に分けて表現してある。上の行には３組の画像があり、組毎に古樹の文様に区画され、古樹は２枝あるいは３枝か４枝で表現され、それぞれの造形が異なっている。古樹の葉脈文をはっきりし、古趣のある表現を呈している。上の行の右組画像では、対面した二人が両手を合わせて立っており、二人ともが雲冠をかぶり、長い袍を着せる。腰に帯をしめ、爪先が上にあがる靴を履く。二人は眉、目、鼻、口をはっきり描き、恭敬の姿で互いに何事かを語っているようである。そして、中組画像は聴琴図で、真ん中に一人が座っており、琴を膝の上に置き、両手で琴を弾く。その右側に座っているもう一人は、両腕を上に挙げて琴の音に合

わせてリズムを敲いている様子である。またその右側の人物は雲冠をかぶり、長い袍を着て両手を合わせて立っており、琴を聞いているようである。その左組画像は訓虎図である。虎を調教する者は立姿で、冠をかぶり、袍を着て帯をしめている。左手を前に出して虎に触れている。虎は地面に伏せる形で、皮の文様がはっきりし、長い尾を上げて揺れるようで、調教されて服従する野獣の姿がいきいきと表わしてある。一方、下の段には左右２組の画像を表現し、その間に博山文様が挟まれている。右組の区画も訓虎図で、調教者を背中に乗せた、虎が首を上げて吠え、４本足を地に踏ん張り、尾を上に舞って走ろうとした姿を描く。左の区画は訓豹図である。調教者は座った姿で、右手を膝の上に置き、左手を前に出して豹の首をさわっている。豹は体を長く、皮に円形文が表されている。前足を地面につけ、後足は空中に留まり、山から飛び出した様子で

第１図　前漢早期人物画像鏡

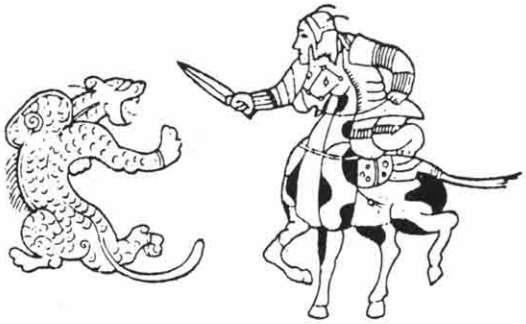
ある。鏡の製作者は、豹の跳躍した瞬間に着目して表現し、強い躍動感を与えている。

この人物画像鏡の表現題材は「二人対話」と「弾琴」という当時の現実生活を示す内容を除き、みな神話物語に集中する。『山海経』「海外東経」に、「・・・君子国在其北、衣冠帯剣、食獣、使二大虎在旁、其人好譲不争」という記事がある。ここに記載された内容は鏡の画像内容に類似するところもある。したがって、画像題材は君子国の物語を表現する可能性が高い。

人物画像鏡の4区は画像の表現題材が完全に一致し、造形も同様で、ただ個別の位置に微小の変動がある。各区の画像に8人、2虎、1豹、4樹、3山からなり、4区の画像の計は、32人、8虎、4豹、16樹、12山を表す。そして、鈕や鈕座に表した4龍と1亀龍合体を加えて、鏡の裏面の狭い空間に77の像を表現している。きわめて精巧な細工と言うほかない。

当該鏡の地紋は細い線で浮き彫りにしたもので、簡潔が特徴である。その中に浅い浮き彫り技法で主文様を示し、主文様が整然とされ、地紋全体は明瞭である。鏡体はやや薄く、縁は鋭く立ち上がる。典型的な戦国鏡とはやや差異があり、前漢前期の鏡に属する。そして、鏡鈕の形は前漢前期鏡によく見られた三弦鈕と異なって獣形を呈する。これまでも動物形鈕をもつ鏡が見つかったことがある。例えば、洛陽市澗西防洪渠83号墓で出土した前漢の蛙形鈕四乳草葉文鏡(注2)、また、上海博物館蔵の前漢中期の獣鈕四龍連弧文鏡と六博鏡(注3)がある。その四龍連弧文鏡の獣首は後ろへ振りむいた姿を表現している。徐州劉執墓で出土した画像鏡は獣鈕であるが、龍と亀の合体で、玄武の造形とはまったく違う。この種の龍と亀と合体した瑞獣造形は、漢代の帛画、壁画あるいは画像石のいずれにも見たことのないもので、文献にも記載されていない。

わが国の銅鏡製作は斉家文化で出現して以来、戦国期に至る間、工芸技術が成熟し、金銀象眼、透かし彫り、漆の彩絵などが発達していた。また、文様装飾に関しては、素文、幾何学文や禽獣文などが主で、写実的な図柄もすでに出現した。例えば、洛陽市孟津金村で出土した金銀象眼狩猟文鏡(第2図)、湖北省雲夢県睡虎地9号秦墓で出土した狩猟文鏡(注4)は、鏡の裏に二人の武人を彫刻する。二人ともに裸足で、片手に盾をもち、もう一方の手に剣をとって二匹の豹と戦っている姿が表されている。鏡の面積が小さいので、匠師の工芸技術を生かす空間が限られてはいるが、表現の題材にはすでに新しい要素が見られた。前漢前期の銅鏡は基本的に戦国銅鏡の造形を引き継いだものである。当時の人々が現実生活に対する期待、神仙世界への憧れ、また観賞、審美意識の高まりに応じるかのように人物画像鏡が誕生した。ただし、当時こうした人物画像鏡が非常に稀で、中原地区の一部諸侯王、列侯に限られて使用されていたようである。その後、一部地域では彩画人物鏡も現れた。例えば、1963年陝西省西安市紅廟坡で出土した連弧縁文銅鏡は赤い地色に彩絵人物、馬、花樹が描かれている(注5)。また、1983年、広州市南越王墓からも3点の鏡が出土(注6)し、その中に彩絵文様の残りの良いものが番号C145－73の鏡である。その外区文様は

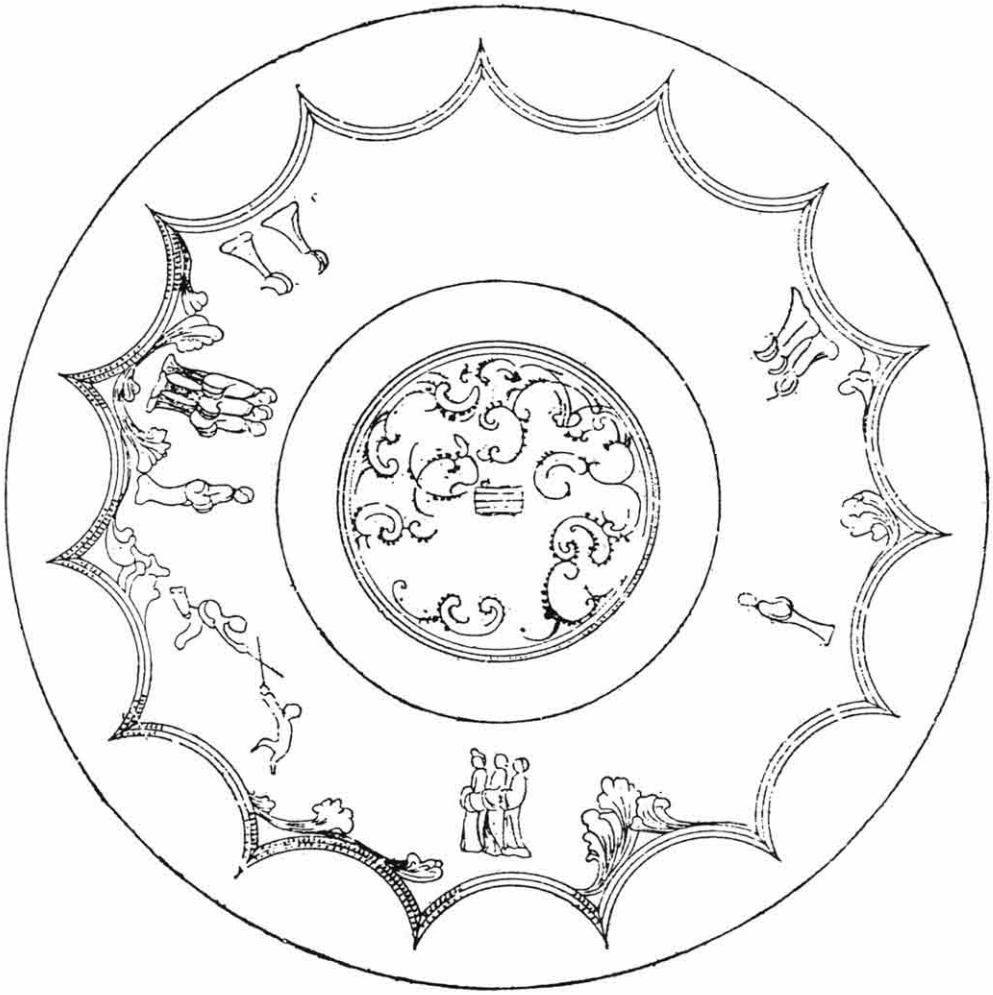


第2図　洛陽孟津金村出土の金銀象眼狩猟文鏡

４組人物からなり、画像主題は二人が腰を曲げ、足を開き、真正面に向かって剣を刺し交わす動作を表現し、またその両側には傍観者が立っている(第３図)。こうした彩画で人物を描く表現手法は、劉執墓から出土した画像鏡とは手法が違うけれども、描いた人物故事はともに伝統題材にないものを表している。

前漢期銅鏡の文様配置は戦国鏡の四分法を継承し、鏡鈕を中心として対称に配置するものである。後漢期の画像鏡も同然である。徐州人物画像鏡の主要文様は同じ四区画であるが、ただし、通常の漢代鏡のように鈕座外周の主要部分を四つに区分し、まだ組ごとに乳釘文で仕切りするのと異なって、博山を各画像組の仕切るものとされ、それは前漢前期の間仕切式蟠璃文鏡の仕切り方と一致する。

造形芸術についても、当該鏡は見てわかるように、後漢期の画像鏡とは異なっている。後漢中期からはじめて現れた画像鏡は、神仙車馬や歴史物語の２種類の図案が最も典型である。その表現技法は立体感と写実性に富んだ半肉浮彫り、あるいは斜めに刻む平彫りに属する。それは同時期に用いられている画像石の半肉彫りの技法と一致するものである。当該鏡の表現技法は平彫りで、人間や物の画像の縁には稜線が整然と施され、早期画像石彫刻技法の陰刻平彫りに類似する(第４図)。ただ異なるところは画像石では輪郭内に陰刻線で衣文や装飾文様の細部を示すのに対

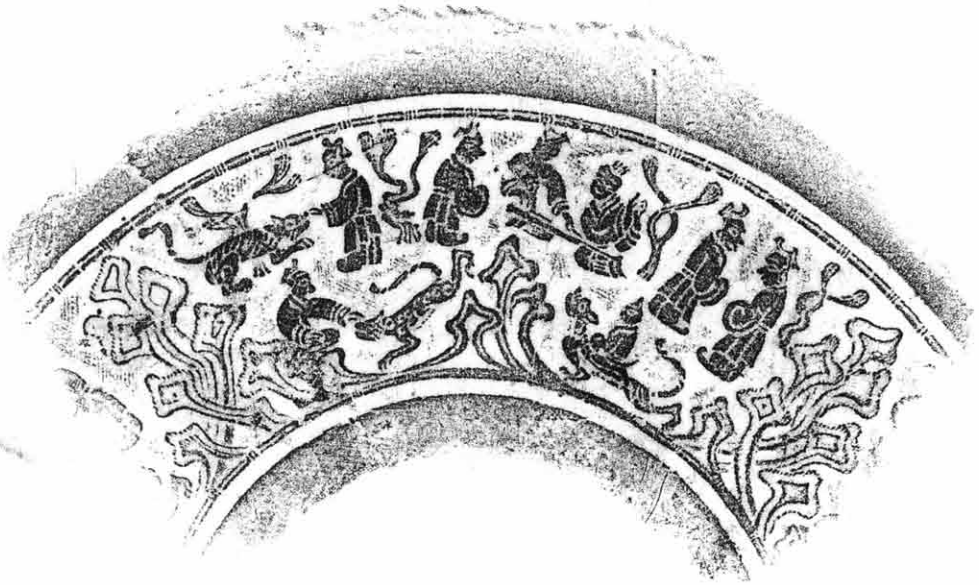


第３図　南越王墓彩絵人物鏡

して、この鏡では画像が小さすぎるし、細い陰刻単線の鋳造が難しいため、衣装文や装飾文様の細部は浅い浮彫りの技法で表現している。この種の平面浅浮彫りは人物の造形表現がわりあい硬く、時期的に古い感があり、前漢前期画像鏡の工芸技術を反映している。

宛朐侯劉執墓は未盗掘で、埋葬年代がほぼ判明している。その実年代は景帝三年(B.C.154年)からであり、それほど新しくはならないはずである、と調査概報に報告されている。この推定に対して筆者は賛成である。通常、銅鏡の鋳造年代は埋葬年代より古いため、この鏡の製作年代は前漢前期に置くのが妥当である。これまで、科学的発掘調査によって出土した前漢前期の画像鏡は、これがただ唯一の例である。だが、記録された同類型の前漢前期鏡が3点ある。一つは劉体智の『小校経閣金文』巻十六に見られたもので、鏡の形態、寸法、主題文様の人物画像は劉執墓の人物画像鏡と完全に一致するもので、同笵鏡の可能性が高い。もう一つは、黄濬編の『尊古斎古鏡集景』図版一八四[注7]に記録されたもので、直径が15cm、前例よりやや小さいものである。その三は、アメリカワシントンのフリア美術館が1935年に中国の古董商から買い取った鏡で、直径18.4cm、該館の収蔵番号f35・13であり、その人物画像、形態、鈕の形は前例と全く同様である[注8]。以上に記録された人物画像鏡はいずれも地紋が見られないが、地紋が繊細すぎて拓本にとれないのではないかと考えられる。この種の人物画像鏡は対比できる資料が少ないが、ここで関係資料を調べることによって、当該類の鏡の製作地を推測することにする。

漢代の徐州は楚国(彭城国)の都城として手工業が発達していた。そこには鉄官が設置されていた。前漢期の「楚采銅丞」という封泥[注9]や徐州で出土した前漢半両銭、五銖銭の鋳型などから、前漢前、中期の楚国は銅鉱石を採るだけではなく、貨幣の鋳造も行われていたことがわかる。それゆえ、鏡を鋳造していた可能性も高い。また、遼陽三道壕魏晋墓より出土した方格規矩鏡の鏡銘には「銅出徐州」が読みとれる[注10]。そして、伝世鏡の鏡銘にも「新作大鏡、幽律三網、銅出徐州、師出洛陽」との銘文が見られる。日本で出土した十数点の三角縁神獣鏡の銘文には「銅出徐州、師出洛陽」や「銅出徐州」という銘文が見つかっている[注11]。これらの資料によって、徐州周辺に銅



第4図　劉執墓出土の人物画像鏡拓影(向部)

器鋳造に必要とされる良質の原料があることは説明できる。漢代鏡に「漢(新)有善銅出丹陽」という銘文が見られるが、丹陽以外に徐州は漢代銅鏡のもう一つの原料産地と言える。漢代の徐州は江蘇省北部、山東省南部の広い地域を含むが、いままでの資料を見ると、当時の徐州内では彭城のみが銅の産地であることが証明されている。これによって、ある学者は徐州と曹魏の「尚方」と同じように、中原地域における銅鏡鋳造業の中心である可能性が高いと推定している。(注12) これは信ずるべき考え方であると思う。銅鏡は徐州地域の前漢墓に一番よく見られる副葬品の一つである。したがって、劉執墓で発見された人物画像鏡は彭城当地で鋳造されたものかもしれない。当時の銅鏡製作においては同笵鋳造技術がすでに普遍的に採用されたと考えられるから、これと同様あるいは類似する人物画像鏡は再び出土する可能性が十分ある。

近年、考古学の発掘調査の進展にともなって、発見された前漢前期の新型式鏡が少なくない。例えば、1980年に山東省淄博で出土した長方形大銅鏡が高さ115.1cm、幅57.7cm。また、1983年に南越王墓で発見された絵画鏡などがある。劉執墓の人物画像鏡の発見は、前漢前期の銅鏡種類

付図　劉執墓出土の人物画像鏡拓影

の認識に新しい内容を提供した。

【訳者後記】

上述した人物画像鏡は、江蘇省徐州市九里山北側簸箕山の未盗掘の漢墓M３から出土したものである。調査概報と訳者の考察手記によると、簸箕山M３は標高86.9mの石灰岩山の山頂部に築いた竪穴木槨墓で、墓壙上に方形墳丘とそれを囲む石垣がある。墓壙は南北長3.6×幅2.6m、深さ8.1m、墓底部に礫石を敷いた上で箱型槨と木棺が置かれている。槨内から出土した副葬品は計50点(組)で銅、鉄器、金銀器、玉石器、陶器、骨器がある。また、槨の東西側に二つの壁龕が掘られており、東龕に動物骨が検出され、床には朱が塗布されている。西龕に50点(組)の陶器を中心に銅、漆器がある。墓壙の東南28mのところに陶俑副葬の陪葬坑が配置している。副葬陶器や陶俑は前漢前期の型式特徴が示され、また、被葬者の腰部あたりに「宛朐侯執」の亀鈕金印(一辺長2.3cm、通高2.1cm、印台座高0.65cm、重さ127ｇ)と重さ309ｇの金製帯金具２点が出土した。このような副葬品様相と『史記』「孝景本紀」や『漢書』「景帝紀」の記載を参照すると、簸箕山M３の被葬者は前漢景帝期の楚国宛朐侯劉執、すなわち楚元王劉交の息子、景帝期の楚王劉戊の叔父にあたる人物であることがわかる。劉執の分封地である宛朐(または冤句と呼び)は、もとが梁国の属県で、景帝中元年(B.C.149年)以降、済陰国の属県となり、現在の山東省荷沢県の西南にある。『漢書』「王子侯表」に劉執が景帝三年(B.C.154年)「呉楚七国の乱」の直接参加者で、反乱が朝廷の武力に鎮圧されたあとまもなく、処刑されたという。それゆえ、当該墓の実年代は紀元前154年頃であることが判明した。その中から出土したこの人物画像鏡は、前漢前期という年代観をもつと言える。

簸箕山M３から出土した副葬銅鏡は３点あり、人物画像鏡を除き、被葬者の足元に蟠文鏡(径9.4cm)と夔鳳鏡(径13.4cm、「安楽未央修相思□母相忘」という鏡銘がある)が置かれてある。人物画像鏡の題材は虎、豹、神樹、博山文様の他「伯牙談琴」、「二人対話」などを四区画に描き、本文に推定されたように、その描写の一部が『山海経』の君子国の神話物語にも類似する。すなわち、表題題材には神仙思想のモチーフが溢れていると言える。これと同笵鏡とみられるもう一枚の鏡がアメリカのフリア美術館に収蔵され、樋口隆康の『古鏡』に前漢代の鏡として紹介されている。同鏡は中国、日本などいくつかの文献にも紹介されている。本文執筆者に取り上げた３点の類例は実に同一の鏡で、書物が何回もの転載によって執筆者が違ったものとして引用した。すなわち、アメリカのフリア美術館に収蔵している人物画像鏡は現在唯一の伝世品で、今回、江蘇省徐州市簸箕山M３からこれと同型式の人物画像鏡が出土したことによって、この２点の同笵鏡の実年代は前漢前期に比定することができる。また、出土墳墓の年代基準だけでなく、鏡の地文や縁部形態からも、この鏡の年代が前漢前期に置かれることが説かれていた。亀鈕金印や金製帯金具などを副葬するのは、被葬者劉執の特殊な社会地位と身分を表すものである。そして、この独特なモチーフを有する人物画像鏡が「宛朐侯(劉)執」という列侯の墓から出土したことは、この鏡には特別な価値があったとも考えられる。さらに、このような神仙世界を活写した鏡がこ

れ程古い時期に遡るのが判明したこと自体は注目すべきであろう。

最後に、訳文の作成にあたり、森下章司氏から御教示をいただいた。紙面を借りて感謝の意を表する。

(Li Yin De・Meng Qiang＝徐州博物館)

(Huang Xiao Fen＝京都造形芸術大学非常勤講師)

注１　「徐州西漢早期宛句侯劉執墓」『文物』1997年２期

注２　『洛陽出土銅鏡』　文物出版社、1988年

注３　陳佩芬『上海博物館蔵青銅鏡』　上海書画出版社、1987年

注４　湖北孝感地区第二期亦工亦農文物考吉訓練班「湖北雲夢睡虎地十一座秦墓発掘簡報」『文物』1976年９期

注５　高大倫等『中国文物鑑賞辞典』　漓江出版社、1991年

注６　広州市文物管理委員会等『西漢南越王墓』　文物出版社、1991年

注７　黄濬『尊古斎古鏡集景』　上海古籍出版社、1990年

注８　Freer Gallery of Art, Washington, U.S.A. の Milo C.Beach 館長より御教示。

注９　王之厚「山東省博物館蔵封泥拾零」『文物』1990年10期

注10　王増新「遼陽三道壕発現的晋代墓葬」『文物参考資料』1955年11期

注11　王仲殊「日本三角縁神獣鏡綜論」『考古』1984年５期

注12　兪偉超『鄂城漢三国六朝銅鏡・序』　文物出版社、1986年

平成９年度の発掘調査事業予定

水谷壽克

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、国・公社・公団及び府の開発事業により消失する遺跡の記録保存を目的として、京都府教育委員会が設立した組織である。年間事業は、京都府教育庁指導部文化財保護課が開発事業者と協議を行ったうえ、当調査研究センターと調整を図り決定される。調査体制は、後掲する組織及び職員一覧のとおりである。

平成９年度に予定している事業件数は30件、遺跡調査か所数は41遺跡を数える。開発行為別では、道路建設に伴う調査が18件、庁舎・住宅建設・施設整備等に伴うものが10件、ほ場整備等に伴うものが２件である。また、原因者別にみると、国・公社・公団関係の受託件数が７件で全体の約３割程度であるが、名神高速道路拡幅事業・国営農地開発事業・舞鶴火力発電所建設事業など大規模開発に伴うものが多く、事業費総額では約７割を占める。

今回、特にその成果が期待されるものは、以下のとおりである。

丹後国営農地開発事業に伴う調査では、久美浜町・峰山町・網野町・弥栄町において、古墳群７遺跡・城跡６遺跡・散布地１遺跡の調査を実施する。今年度は城跡の調査件数が多く、丘陵尾根筋の平坦部に築かれた曲輪部の調査を行い、城跡の有機的な機能の解明が期待される。

松ヶ崎遺跡は、弥生時代前期から中期にかけての集落遺跡として知られていた。昨年度、道路改良事業に伴い実施した調査では、弥生時代の遺物を含む自然流路とともに奈良時代の遺物包含層を検出し、近隣に奈良時代集落跡の存在が明らかになった。今年度も継続して遺跡の広がりや性格等を確認する調査を実施する。

浦入遺跡は、舞鶴火力発電所建設に伴う調査である。平成７年度から調査を実施し、丘陵部では古墳群、湾岸部には縄文時代から平安時代に至る遺構を検出している。特に、縄文時代遺構や奈良・平安時代の大規模な製塩遺跡の存在は、舞鶴湾岸の特色で、その解明が期待される。

余部遺跡は、昭和40・41年度に発掘調査が行われ、東西900m・南北1,000mの範囲に及ぶ弥生時代前期から中世にわたる複合遺跡であることが確認されている。府道新設及び庁舎建設により２か所で範囲確認の調査を実施する。

内里八丁遺跡は、第二京阪道路建設に伴い昭和63年度から継続して調査を実施している。弥生時代の水田遺構・古墳時代の集落跡・奈良～平安時代の官衙色の強い建物跡（奈良園？）など貴重な成果を得ている。今年度も継続して遺跡の広がりを追求する。

椋ノ木遺跡は、木津川左岸の沖積地に営まれた中世の集落遺跡である。木津川上流浄化センター建設に伴い、平成７年度から調査を実施し、平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺構・遺物

付表１　平成９年度事業一覧

遺跡名	種別	所在地	調査予定期間	調査予定面積	調査原因
天王山古墳群	古墳	久美浜町	４月～７月	２基	農地開発
谷垣古墳群	古墳	久美浜町	８月～11月	３基	
別荘古墳群	古墳	久美浜町	４月～７月	２基	
スガ町古墳群	古墳	網野町	４月～８月	10基	
浅後谷南城跡	城跡	網野町	７月～９月	1,500㎡	
浅後谷南遺跡	集落跡	網野町	９月～12月	1,000㎡	
生野内城跡	城跡	網野町	７月～12月	1,000㎡	
吉沢城跡	城跡	弥栄町	４月～12月	1,000㎡	
菩提城跡	城跡	弥栄町	４月～12月	800㎡	
茶カス古墳群	古墳	弥栄町	４月～12月	２基	
芋野城跡	城跡	弥栄町	４月～６月	500㎡	
愛宕神社古墳群	古墳	弥栄町	４月～６月	２基	
苗代城跡	城跡	峰山町	４月～８月	1,000㎡	
相之目古墳	古墳	峰山町	４月～６月	１基	
松ヶ崎遺跡	集落跡	網野町	６月～９月	500㎡	道路建設
横枕遺跡	集落跡	網野町	９月～12月	1,000㎡	道路建設
奈具岡遺跡	集落跡	弥栄町	９月～12月	700㎡	道路建設
延利遺跡	集落跡	大宮町	９月～11月	300㎡	道路建設
浦入遺跡	集落跡	舞鶴市	４月～２月	9,000㎡	施設建設
竹中遺跡	集落跡	舞鶴市	７月～10月	500㎡	道路建設
太田遺跡	集落跡	亀岡市	９月～２月	1,200㎡	ほ場整備
余部遺跡	集落跡	亀岡市	５月～12月	2,000㎡	道路建設
余部遺跡	集落跡	亀岡市	６月～８月	400㎡	庁舎建設
平安京右京	都城跡	京都市	10月～２月	1,500㎡	施設建設
成勝寺跡	都城跡	京都市	10月～１月	1,200㎡	施設建設
長岡京跡左京	都城跡	向日市	４月～10月	7,000㎡	道路建設
中海道遺跡	集落跡	向日市	５月～８月	450㎡	道路建設
鶏冠井清水遺跡	集落跡	向日市	５月～８月	750㎡	施設建設
下植野南遺跡	集落跡	大山崎町	５月～２月	2,400㎡	道路建設
芝山遺跡	集落跡	城陽市	６月～２月	4,000㎡	施設建設
佐山遺跡	集落跡	久御山町	５月～８月	1,000㎡	道路建設
内里八丁遺跡	集落跡	八幡市	４月～２月	4,000㎡	道路建設
宮ノ背遺跡	集落跡	八幡市	５月～９月	1,000㎡	道路建設
備前遺跡	集落跡	八幡市	７月～９月	700㎡	道路建設
椋ノ木遺跡	集落跡	精華町	５月～２月	3,000㎡	施設建設
畑ノ前遺跡	集落跡	精華町	11月～２月	600㎡	道路建設
森垣内遺跡	集落跡	精華町	５月～11月	2,000㎡	道路建設
木津城跡	城跡	木津町	５月～９月	1,500㎡	団地造成
片山１号墳	古墳	木津町	７月～10月	１基	
天神山遺跡	集落跡	木津町	７月～10月	1,000㎡	
大畠遺跡	集落跡	木津町	10月～２月	1,000㎡	道路建設
平遺跡	集落跡	網野町	４月～３月	整理	道路建設
平安京跡	都城跡	京都市	４月～３月	整理	庁舎建設
長岡京跡	都城跡	向日市	４月～３月	整理	住宅建設
桑原口遺跡	集落跡	宮津市	４月～３月	整理	道路建設

を検出している。

宮ノ背遺跡・備前遺跡は、摂南大学校地内の畑で竪穴式住居跡の断面が露呈し、弥生式土器片が出土していることから、確認された遺跡である。府道新設に伴い調査を実施し、集落の広がりを確認する。

森垣外遺跡は、遺物散布地として登録されていた遺跡である。昨年度、山手幹線街路建設に伴い試掘調査を実施した結果、古墳時代の住居跡・溝・土坑、中世の耕作溝や包含層を確認した。今年度は面的に調査を行うとともに、試掘トレンチを拡張して遺跡の広がりを追求する。

平安京跡・長岡京跡の都城跡関係では、３件の発掘調査を予定している。長岡京跡では、名神高速道路拡幅事業に伴い、約50,000㎡を対象とした桂川パーキングエリアの調査を継続して実施している。昨年度は左京南一条四坊及び左京二条四坊の面的調査を実施し、南一条大路等の条坊や宅地割りが明らかにされた。また、その下層の東土川遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓や戦士の墓と見られる木棺墓を検出している。今年度は左京南一条四坊及び二条四坊で約7,000㎡の面的調査を実施する。

普及啓発事業は、下記のとおり計画している。

付表２　普及啓発事業予定一覧

事業名	回数	月　日【予定】	実　施　内　容	会　場
埋蔵文化財セミナー	第79回	６月28日（土）	平成８年度の調査成果から	舞鶴市
	第80回	８月16日（土）	小さな展覧会内容に則したスライド報告会	向日市
	第81回	２月21日（土）	都城関係	京都市
小さな展覧会	第15回	８月16日（土） ～８月30日（日）	平成８年度府内遺跡発掘調査の速報展	向日市
機関誌の刊行	年４回	６月、９月 12月、３月	『京都府埋蔵文化財情報』	

（みずたに・としかつ＝当センター調査第１課課長補佐兼企画係長）

平成８年度京都府埋蔵文化財の調査

伊野近富

平成８年度内に京都府管内で届け出・通知がなされた発掘調査は287件を数え、前年度に比べると25件の増となっている。このうち、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した調査は、別掲に示したとおりである。以下、平成８年度に京都府内で行われた発掘調査成果について略述してみよう。

旧石器・縄文時代

京都北部の縄文時代を代表する丹後町平遺跡が30数年ぶりに調査された。遺構は埋甕墓１基と竪穴式住居跡状１基のみであるが、遺物は縄文時代前期末から晩期までのものが大量に出土した。在地の土器がほとんどであるが、中には北陸の土器及び玉類も出土した。舞鶴市浦入遺跡では縄文時代早期末から後期の土器が出土した。大山崎町脇山遺跡では、埋甕墓らしき遺構が確認された。向日市森本町では縄文時代のゴミ捨て場からタヌキの歯と骨が出土した。京都市左京区北白川では、「花折断層」が調査され、出土遺物から縄文時代後期以降に少なくとも１回、マグニチュード７クラスの地震があったことが確認された。なお、城陽市森山遺跡は、国史跡の縄文時代の遺跡であるが、同市の緑と歴史の散歩道事業として公園整備された。

弥生時代

網野町松ヶ崎遺跡では前期を中心とする遺物が出土した。田辺町稲葉遺跡では、弥生時代前期の方形周溝墓が確認された。溝は、幅約1.5～２m・深さ0.7mで、一辺12mの正方形にめぐらされていた。中期としては、八幡市内里八丁遺跡の竪穴式住居跡１基が確認された。直径約６mの円形である。京都市南区東土川遺跡では、石剣の身１点、先端５点と石鏃10点が木棺跡の中でまとまって出土した。これは方形周溝墓の溝内で確認した。この他、周溝墓は４基確認された。

大山崎町下植野南遺跡では鉄剣形の磨製石剣が検出された。この石剣は長岡京市神足遺跡出土のものと類似しており、拠点的な集落であった神足遺跡と協力関係にあったのではと指摘されている。大山崎町脇山遺跡では方形周溝墓の溝が確認された。

中期の弥栄町奈具岡遺跡では鍛冶炉らしきものが出土した。弥生時代末期の向日市中海道遺跡では焼けた土壁片や鍛冶工房の存在を裏付ける「鍛造剝片」などが整理作業で確認された。

古墳時代

弥栄町大田南６号墳では、長さ約10m・深さ２m以上の墓壙が検出された。墳形は、円形で直径32mである。墓壙底面には礫床が施されていて、その痕跡から組合式木棺と思われる。なお、近隣には「青龍三年」銘鏡が出土した５号墳がある。京都北部の古墳時代前期の代表的な白米山

付表　平成８年度発掘調査地一覧表

番号	遺　跡　名	種　別	所在地	担当者	調査期間	概　　要
1	黒部遺跡	窯　跡	弥栄町	岡崎　研一	４月～５月	製鉄炉２基、炭窯１基。
2	奈具岡北古墳群	古　墳	弥栄町	河野　一隆	４月～７月	古墳１基。弥生墓２基。
3	奈具岡南古墳群	古　墳	弥栄町	岡崎　研一 橋本　稔	４月～１月	古墳21基。
4	奈具岡遺跡第13次	集落跡	弥栄町	竹原　一彦 河野　一隆	４月～７月	弥生時代の住居跡７基以上。
5	シミズ谷城跡	城　跡	弥栄町	柴　　暁彦	５月～８月	(Ａ地区)遺構・遺物なし、(Ｂ地区)室町後期の郭。
6	天王山古墳群	古　墳	久美浜町	黒坪　一樹	６月～１月	(Ａ支群)古墳６基、経塚。(Ｂ支群)古墳２基。
7	平遺跡	集落跡	丹後町	河野　一隆	８月～12月	縄文前期～晩期の堆積層、埋甕。古墳時代の石積遺構。
8	松ヶ崎遺跡	集落跡	網野町	村田　和弘	５月～８月	弥生土器、木器。奈良時代の人形。
9	長岡京跡右京第547次	都城跡	長岡京市	柴　　暁彦	10月～２月	中世の地境の溝。自然流路。
10	浦入遺跡	集落跡	舞鶴市	石井　清司 増田　孝彦 小池　　寛 奈良　康正 筒井　崇史	４月～２月	竪穴式住居跡12基、鍛冶炉跡、製塩炉跡。縄文～奈良時代の遺物。
11	浦入西古墳群	古　墳	舞鶴市	増田　孝彦 奈良　康正	４月～２月	古墳１基、横穴式石室。
12	桑原口遺跡	集落跡	宮津市	田代　　弘 小池　　寛	４月～８月	弥生後期の溝。
13	今福北城跡	城　跡	宮津市	田代　　弘	７月～９月	顕著な遺構・遺物なし。
14	盛林寺裏山古墳	古　墳	宮津市	田代　　弘	６月～７月	古墳の兆候なし。
15	篠窯跡群	窯　跡	亀岡市	石井　清司 野々口陽子	６月～７月	窯体１基、灰原一部残存。
16	長岡京跡左京第389次・中福知遺跡	都城跡	向日市	小池　　寛 竹下　士郎	６月～１月	中世の流路、耕作溝、掘立柱建物跡。
17	中海道遺跡	都城跡	向日市	田代　　弘	10月～２月	竪穴式住居跡２基、溝跡、柱穴。
18	長岡京跡右京第526次	都城跡	長岡京市	竹下　士郎	５月～６月	近世土坑、顕著な遺構なし。
19	長岡京跡右京第541次	都城跡	大山崎町	野々口陽子	９月～12月	平安時代の溝。弥生中期の方形周溝墓。掘立柱建物跡。
20	平安京跡	都城跡	京都市	石井　清司 竹下　士郎	11月～２月	平安～江戸時代の土坑、溝、井戸。中世墓２基。弥生土器
21	西ノ口遺跡	散布地	八幡市	奈良　康正	10月～２月	竪穴式住居跡、溝(弥生後期)
22	宮ノ背遺跡	散布地	八幡市	奈良　康正	11月～２月	竪穴式住居跡４基
23	内里八丁遺跡	集落跡	八幡市	森下　　衛 古瀬　誠三 大岩　洋一	４月～２月	奈良～平安時代の掘立柱建物跡、井戸、土坑、耕作溝。古墳時代前期の竪穴式住居跡、流路跡。
24	田辺城跡	城　跡	田辺町	石尾　政信	５月～８月	石垣、石段、堀切。方墳２基(古墳中・後期)。竪穴式住居跡・方形周溝墓(弥生中期)。
25	興戸古墳群	古　墳	田辺町	石尾　政信	７月	古墳の兆候なし。

26	菟道遺跡	集落跡	宇治市	石尾　政信	11月～12月	顕著な遺構・遺物なし。
27	西隼上り遺跡	集落跡	宇治市	石尾　政信	12月～２月	顕著な遺構・遺物なし。
28	芝山遺跡	散布地	城陽市	古瀬　誠三	12月～１月	顕著な遺構・遺物なし。
29	椋ノ木遺跡	集落跡	精華町	伊賀　高弘 森島　康雄	５月～２月	平安～鎌倉時代の環濠、井戸掘立柱建物跡、溝、土坑。
30	柿添遺跡	集落跡	精華町	引原　茂治	８月～12月	古墳時代の溝・土坑。奈良時代の流路。
31	森垣外遺跡	散布地	精華町	有井　広幸	12月～２月	
32	五領池東窯跡	窯　跡	木津町	有井　広幸	５月～９月	奈良時代の平窯３基、溝。
33	長岡京跡左京第384次	都城跡	京都市	戸原　和人 竹井　治雄	４月～９月	南一条大路、門、溝、井戸、土坑。弥生水田、方形周溝墓
34	長岡京跡左京第385次	都城跡	京都市	岩松　　保 中川　和哉 野島　　永 八木　厚之 野々口陽子	５月～２月	南一条大路、水路、掘立柱建物跡、井戸、溝、土坑。弥生～古墳時代の溝、方形周溝墓

古墳が、一度大幅な改造をしていたことが判明した。前方後円墳の前方部に突出部を設けていた。調査は今後も継続されるようで、その成果が注目される。久美浜町天王山古墳群では、前期から中期にかけての箱式石棺が確認された。また、17号墳ではガラス玉100点以上、捩文鏡１面が出土した。山城町椿井大塚山古墳では、国内最大の墓壙が確認された。規模は長さ21m・幅13m以上・深さは５mに達する。内部は階段状となっていた。この古墳は「三角縁神獣鏡」が30数枚出土したことで有名な古墳である。

綾部市大宮３号墳では、特異な石床状施設をもつ組合式木棺が検出された。弥栄町奈具岡南古墳群では、前期から後期初頭までの25基の古墳が調査された。宇治市庵寺山古墳の埋葬施設は、大型の箱形木棺をもつ粘土槨であることが判明した。また、半円方形帯神獣鏡１面や鉄鎌も出土した。

長岡京市雲宮遺跡では、流路跡が確認され、岸辺にあたる場所から大量の土師器と木製品が出土した。土師器は、小型丸底壺や高杯が多い。木製品では、梯子の一部や筵を編むときの重りに使う「木錘」が出土した。ここで、祭祀を行った可能性もある。

中期後半に属するものとして城陽市梶塚古墳が調査された。円筒埴輪17個が発見され、その結果、古墳は南北が推定64mであることが確認された。

中期から後期に属するものとして園部町徳雲寺北古墳群６基が調査された。１号墳からは５世紀前半頃の蓋(きぬがさ)形・家形などの形象埴輪が出土した。

丹後町にある国史跡産土山古墳は、丹後の古墳時代中期を代表する古墳である。これが、約60年ぶりに再調査され、直径約55m・高さ10mの円墳であることが判明した。また、長持形石棺の位置も確認された。その大きさは圧倒的である。

後期に属する大宮町左坂南３号墳では、ガラス玉約60個が見つかり、その内10点は黄色であった。福知山市牧正一古墳の３回目の調査で、３基の石室のうち、第一石室の大きさが全長約12mと判明した。亀岡市北ノ荘古墳群では、６世紀前半とみられる横穴式石室が確認された。14号墳

では玄室の入り口をふさいでいる板石が確認され、石室の形状は九州北部の影響をうけ、特に羨道は「ハ」の字に開いていた。前方後円墳である長岡京市井ノ内稲荷塚古墳では横穴式石室が確認された。規模は玄室の長さ５ｍ・幅2.5ｍ、羨道の長さ約10ｍで、乙訓地域では、物集女車塚古墳に匹敵する。巨石を積み上げる工法は京都市蛇塚古墳などと似ており、物集女車塚古墳とは系譜の異なる首長であった可能性が指摘されている。石室からは馬具や刀装具などが出土した。

生産遺跡としては、園部町壺の谷窯跡群の調査がある。須恵器窯跡８基が調査され、その内３基に溝があった。13号窯は、斜面を全長12ｍ・最大幅1.8ｍ・深さ1.1ｍの大きさに掘り下げた窖窯である。最上部の煙出し部分から窯の南側に、窯と平行するような形で、深さ20～30㎝・幅20～40㎝の溝が掘られていた。これらの窯の時期は６世紀後半～７世紀前半である。丹後町平遺跡では、中期の製塩土器が出土し、これは京都府内最古の例となった。また、石積み遺構も確認され、この周辺から祭祀遺物も出土した。

飛鳥・奈良時代

長岡京市神足遺跡では、飛鳥時代初期の竪穴式住居跡４基と掘立柱建物跡３棟が確認された。また、滑石製の紡錘車が１点出土した。八幡市内里八丁遺跡では、小鍛冶跡２か所が確認された。白鳳時代に属するものとしては、向日市鶏冠井の勝山中学校新体育館建設予定地の調査例がある。ここで、格子目叩きの瓦などが出土した。瓦が出土する地点が限られていることから、乙訓郡衙に付属する寺院があったのではないかとの指摘がある。

奈良時代前期に属する大山崎町堀尻遺跡では、奈良時代の高僧行基が建立した山崎院のものとみられる瓦が出土した。瓦にはヘラで「佐伯麻女　虫麻」と刻まれており、これらは寄進者の名前であるという。恭仁宮跡の調査では、宮の範囲が南北約750ｍ・東西約560ｍと確定できた。西面大垣に沿って外側に長さ54ｍの溝が発見され、ここから「里」と書かれた木簡が出土した。また、「宅」などの文字が書かれた土器も出土した。「里」は715年から740年はじめまで施行された地方行政区画であるので、文献で知られる740年12月15日よりさかのぼって造営が始まっていた可能性がでてきた。

奈良時代後期に属する網野町松ヶ崎遺跡では、祭祀に使用された木製人形が出土した。丹波国府跡といわれる亀岡市千代川遺跡では、掘立柱建物跡３棟が確認された。柱穴掘形の大きさは約80㎝である。建物跡は南北約15ｍ・東西約６ｍの廂付きで、国府の主要な建物の一つだった可能性がある。長岡京市の旧乙訓寺推定地から三彩陶器片が出土した。木津町の五領池東瓦窯跡の瓦は、奈良市の法華寺阿弥陀浄土院の瓦と同じで、そこに供給したとされる。法華寺阿弥陀浄土院は759年に光明皇太后の発願で法華寺境内に着工されたという。

弥栄町黒部遺跡では、奈良時代後期から平安時代前期頃の製鉄炉２基と炭窯１基が検出された。

平安時代

長岡京期では多数の文字資料が得られ、遺跡の内容把握が深化している。

向日市鶏冠井町では「大田六段」などと書かれた天皇家専用の田を検田した記録とみられる漆紙文書が出土した。また、三条大路南側溝で、「内膳正解申請□」と書かれた木簡も出土した。

これは内膳司の長官の上申文書という。東一条大路西側溝から木簡の表に「春宮坊」、裏に「古宍」と書かれたものも出土した。春宮は皇太子のことである。この他、丹後国竹野郡から白米を送ったことを示す木簡も出土した。

遺構として特筆すべきは、長岡宮の北側に大規模な離宮(北苑)が確認されたことである。ここでは築地塀に囲まれた建物跡と池が検出された。池の底土を分析した結果、当時の野菜である水葱が確認され、天皇の直営菜園があった可能性がある。また、周辺のその後の調査で北苑は120m四方であった可能性が高いことと、従来長岡京の北限とされていた通りより二筋南の北一条大路が北限であったことを示唆する資料も得られた。

この他、「兵部省」の正殿かという建物跡や、桓武天皇の離宮「猪隈院」(長岡京左京二条二坊五町から六町にかけて)ではという建物、「大蔵」の一部(北方官衙跡)などの可能性が指摘された。また、造営時の地鎮祭跡とみられる杭跡(朝堂院の西隣り)、大規模な邸宅跡か役所跡(京都市南区久世)などが出土した。長岡宮内では鋳造炉もみつかり、急造の都作りであったことを示唆している。

遺物としては、向日市上植野町では後期難波宮式の鬼瓦片、長岡京市井ノ内では口の部分がない須恵器の壺内部に1～2cm大の小石と瓦片が整然と並べられており、祭祀用かとしている。大山崎町の第4次山城国府跡で道路の側溝が確認された。大山崎町脇山遺跡では掘立柱建物跡を建てる際の布掘りと思われる溝が出土した。ここは長岡京右京八条四坊五町と六町にまたがる地で、これまで同時期の遺構は検出されていなかった。向日市鶏冠井町では、「長岡宮跡朝堂院西第四堂跡」が史跡公園として整備された。

平安時代初期に属するものとしては「内酒殿」と書かれた木簡が、平安宮の井戸跡から発見された。弘仁元年の年号もあり、通説より数十年古く内酒殿が存在したらしい。平安京右京一条三坊二町では、9世紀後半から10世紀頃の小径や橋脚跡が確認された。平安京の北郊にある京都市北区上ノ庄田瓦窯では、4基の窯が確認された。作業小屋やロクロ軸穴も検出され、一連の瓦作りを想像させる資料である。平安京右京六条一坊では9世紀頃の貴族の邸宅跡が確認された。まず、9世紀はじめには一町を四等分し、4人の貴族が居を構えていたとみられる。その後、9世紀中頃にそれらの建物を建て替え一町分を再開発し、一人の高級貴族が邸宅を構えていたことが判明した。東西5間・南北2間の身舎に、外側4間に廂、北側に孫廂を設けていたことが判明した。

舞鶴市浦入遺跡では、「笠百私印」と刻印された製塩土器が出土した。笠一族のひとりで百という人の私印とみられる。笠氏は通説では古代吉備にいたとされるが、丹後にもいたという証拠となった。亀岡市篠窯跡群のマル山1号窯跡では、9世紀前半の須恵器焼成窯がみつかった。なかでも、うわぐすりをかける前の緑釉陶器皿が数点みつかり、篠窯跡で10世紀前半に始まるとされた緑釉陶器生産が約100年さかのぼる可能性がでてきた。なお、一部天井部も遺存していた。八幡市内里八丁遺跡では、9世紀の大規模な掘立柱建物跡が確認された。付近から緑釉陶器も多数出土し、何らかの公的施設があった可能性が高く、『延喜式』に記載された「奈良園」を管理していた施設ではないかという。

大山崎町天王山山頂付近の山崎城跡では、平安時代前期の灰釉陶器壺が出土した。火葬墓である。長岡京市開田では大型の井戸が確認された。井戸の底から「隆平永寳」をはじめとする８枚の貨幣や横櫛５点などが出土した。

平安時代中期に属するものとしては福知山市上楽遺跡がある。これは建物１棟分とみられる柱穴と盛り土部分がある。また、土師質の香炉も見つかったことから山岳寺院と考えられる。京田辺市興戸遺跡では、掘立柱建物跡や溝、井戸などが確認された。

平安時代後期に属するものとしては京都市右京区の法金剛院旧境内跡から出土した瓦経がある。「無量義経」の一部である。遺構は寝殿造りにともなう中門廊や池が確認された。京都市左京区の京大西部構内遺跡で屋敷跡が発見された。近くに院政を象徴する御所「白河北殿」があったことから、御所を警護した武士の屋敷跡とみられる。宇治市平等院庭園の今回の調査によって、創建当初の鳳凰堂を支えた中国風基壇の存在と、鳳凰堂を囲む池の独創的な水の流れが明らかとなった。また、南側の柱跡とみられる穴から、写経した木簡である「こけら経」が確認された。宇治市白川金色院の中心施設「文殊堂」跡から、仏像を安置した「一間四面堂」が出土した。12世紀初頭頃の土器が出土し、藤原頼通の娘寛子が1102年に創建した記録とほぼ合致した。また、創建後少なくとも一回改修され、その際、閼伽棚を付設していたことも判明した。宇治市赤塚遺跡では、平安時代末期の盛り土跡や鎌倉時代の住居跡が確認された。盛り土は傾斜地を平坦にするもので、穴には磁器や土器類が多量に捨てられていた。

京都市下京区では平安時代前期から室町時代にかけての壬生大路側溝が確認された。９世紀中頃に現存幅2.5mの溝が掘られた後、９世紀後半から10世紀前半にかけて西に約１mずつ移動しながら溝が二回掘り直されていた。13世紀には更に西に掘られており、大路の路面は室町時代には都造営当初より約4.2m狭くなっていた。

鎌倉・室町時代・江戸時代

夜久野町東シ城跡では、一辺４mの方形土壇が確認され、中央に須恵器壺が埋められていた。石塔の基壇と思われる。

京都市下京区の五条警察署の調査地では、鎌倉時代の井戸跡から二枚の板の間に挟まった形でギンブナが出土した。うろこも残った保存状態の良いものであった。精華町椋ノ木遺跡では中世前期の環濠集落とみられる大規模集落跡が確認された。遺物は、大和産の瓦器椀をはじめ、摂津・播磨で生産されたものが多く、その他、中国製の陶磁器が出土した。木津川を利用した水上交易の中心地であったと思われる。

弥栄町シミズ谷城跡では、15・16世紀の建物跡や土坑、鍛冶炉跡などが出土した。また、棹ばかりの精巧な重りやすり鉢・茶臼・金属片なども出土した。舞鶴市引土では道路工事中に古銭が１万枚以上出土した。珍らしいものとしては元の「至大通寳」、安南の「天福鎮寳」、高麗の「三韓通寳」「海東重寳」などがある。

向日市物集女城跡では、城の南東隅に築城後新たに設けられた「張り出し部」が確認された。向日市中福知遺跡では、小畑川の旧流路が確認され、14世紀頃には現在の流路に付け替えられて

いたことが判明した。長岡京市開田城跡は一辺約90mの正方形の館跡であったことが判明した。長岡京市の大正寺本堂の下から戦国時代から江戸時代初頭頃の座棺墓が見つかった。宇治市西笠取遺跡では集落が14世紀にはあったことが判明した。遺物は、常滑焼きや信楽焼き、中国製陶磁器などが出土し、山間部ではあるが中世に物流が及んでいたことが判明した。京田辺市田辺城跡では花崗岩を使った石垣や瓦を使った排水溝などが確認された。大量の瓦は15～16世紀前半で、この時期に瓦葺きの建物があったと推定される。これを城の施設とすれば城郭史を書き替える成果である。ただし、寺とする意見もある。大山崎町成恩寺跡で室町時代末期の鬼瓦の一部が出土した。京都市下京区五条警察署の調査地では、江戸時代の豪商として栄えた「一四屋倉」の屋敷跡が調査され、茶道具などが出土した。

なお、夜久野町教育委員会には、東シ城跡の石塔について資料の提供を受けた。記して感謝します。

（いの・ちかとみ＝当センター調査第２課調査第１係長）

平安京跡の発掘調査

竹下士郎

1．はじめに

今回の調査は、京都府五条警察署庁舎の改築工事に伴う事前調査として、京都府警察本部の依頼を受けて実施したものである。調査地は京都市下京区烏丸通高辻上ル大政所町682番地に位置し、京都市街地の中央部を南北に貫く烏丸通に面した、周辺には大きなビルが建ち並ぶビジネス街の一角である。調査地は平安京の条坊復原図によると、左京五条三坊十一町の南東部にあたり、一町域を三十二等分した四行八門制では、西四行北五・六・七門にまたがるところである。

現地での発掘調査は、平成８年11月５日に開始し、平成９年３月11日に終了した。遺物、図面等の整理作業、概要報告の作成については、平成９年度に行う予定である。

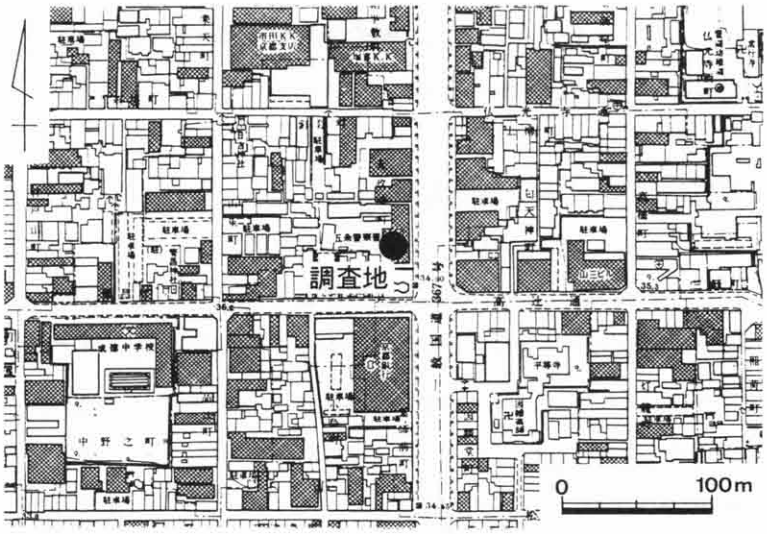
2．調査の概要

今回の調査は前述したように、京都府五条警察署の庁舎建て替えに伴うもので、調査前、警察署旧庁舎が建てられていたところである。旧庁舎には地下室なども設置されており、調査地の多くの部分が深いところまで攪乱されていた。調査はこの攪乱された部分、さらには近世の埋土を取り除くことから始めた。現地表面から1.5～2.0mを重機により掘削し、それより下面は人力による掘削を行った。以下、今回の調査によって検出した遺構や出土した遺物について、現時点で理解できることを簡単に整理しておきたい。

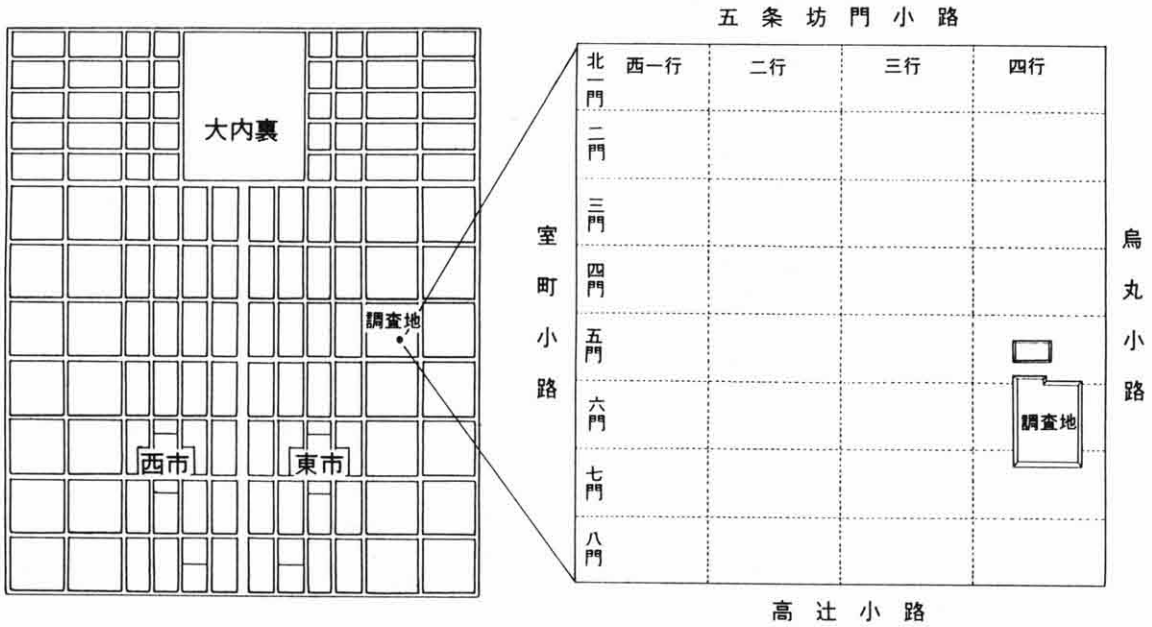
①平安時代

平安京造営当初から前半期に該当する遺物や遺構は認められなかったが、後半期以降と考えられる遺構や遺物を検出した。

溝（ＳＤ143）　調査地の南部で東西方向に検出したもので、検出全長約3.0m・幅約50cmを測る。明灰黄褐色の埋土で、10世紀前半の土師器皿のほか、緑釉陶器片や高杯脚



第１図　調査地位置図(1/5,000)



第２図　平安京条坊図及び調査地位置図

部なども出土した。

土坑（ＳＫ146）　調査地南側の中央部で検出したもので、推定直径約3.0m、検出面からの深さ約1.0mを測る円形の土坑である。10世紀末～11世紀初めの白磁碗・緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器・土師器皿・延喜通寶などが出土した。ＳＤ143を切っている。枠材などは認められなかったが、中央部を一段深く掘り込んでおり、井戸であった可能性がある。

土坑（ＳＫ130）　一辺1.5～2.0mの隅丸方形を呈する土坑である。前述したＳＫ146を切っている。この土坑も中央部に円形に深く掘り込まれた部分を確認しており、井戸であった可能性がある。ＳＫ146とほぼ同時期の白磁・緑釉陶器・須恵器・土師器皿などが出土した。

井戸（ＳＥ148）　検出面からの深さ約1.5mを測り、最深部に一辺0.5mの方形となる木枠が残存していた。木枠の残存状況は極めて悪い。緑釉陶器・須恵器・白磁・土師器皿などが出土した。ＳＫ146・ＳＫ130を切っている。

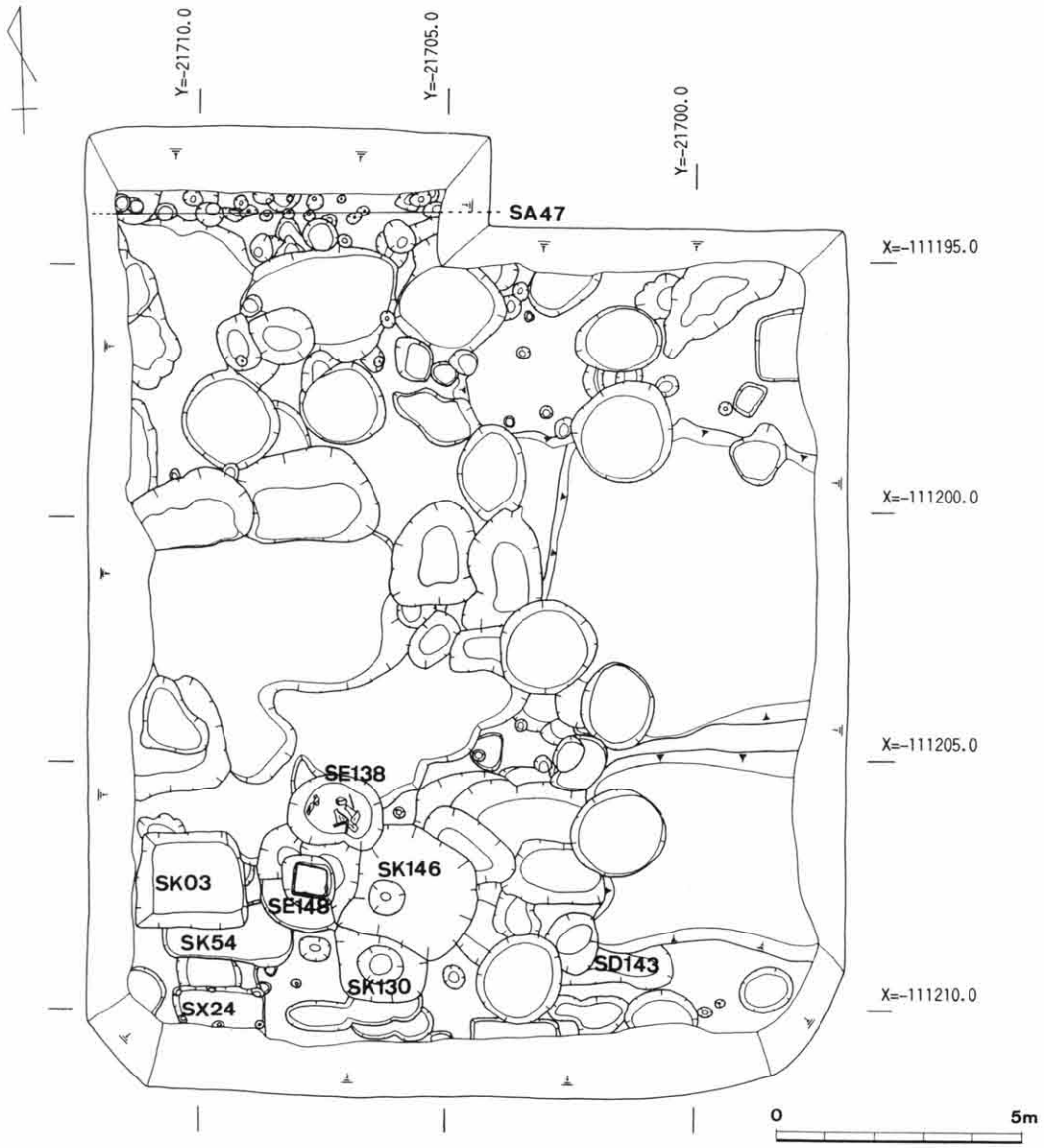
②中世

柵列（ＳＡ47）　調査地の北端部で検出した、東西に並ぶ柱列である。今回は四間分を検出した。各ピットは直径50～70cm、その間隔は約1.2mを測る。ピット中に石を据えたものも数か所ある。なお、この周辺には南北幅約１mの範囲に無数のピットが確認でき、この柵列については少しずつその位置を変えながら、平安時代末から室町時代にかけて最低３回の建て替えがなされたものと考えられる。これらの柵列の座標値は、およそX=-111,193.6mとなり、北五門と六門を区画する推定ライン（X=-111,193.48m）とほぼ一致する。

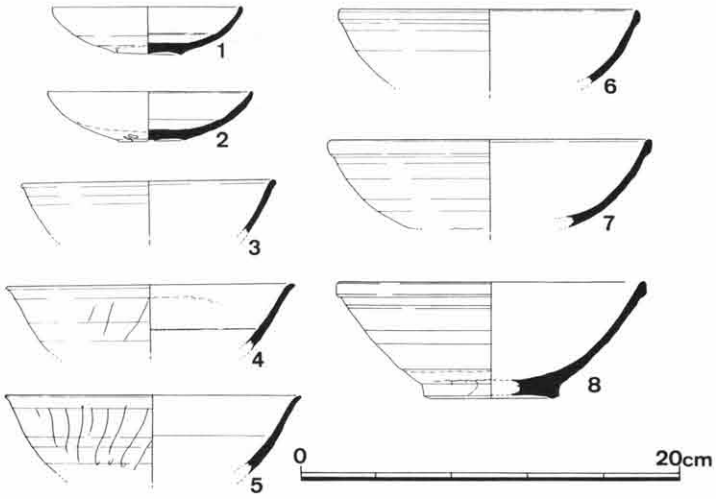
井戸（ＳＥ138）　ＳＥ148を切っている。直径約4.0m、検出面からの深さは約1.8mを測る。板材が折り重なるように残存していたが、破壊されており、詳しい状況は不明である。これらの板

材の上部で、直径約20cmの円形曲物が出土した。また、板材と粘土の間にサンドウィッチ状に挟まれて、骨のほか鱗、表皮まで残存した魚の遺体が出土したが、この魚は滋賀県立琵琶湖博物館・中島経夫氏の鑑定により、「ギンブナ」であると判明した。

墓(ＳＸ24)　南壁直下西寄りで検出した長方形の土坑である。短辺1.0m・長辺2.0m、検出面からの深さ30cmを測る。また、各辺に対応するように、直径約30cmのピットを計６か所検出した。このことから、この土坑上には、１間×２間の覆い屋があったと推定される。なお、検出時には上面に薄く炭層の堆積が見られ、この覆い屋は何らかの理由で焼け落ちたと考えられる。埋土中からは人頭大の礫とともに、13世紀後半の土師器皿・白磁双耳壺・常滑焼甕などが出土した。規模・出土遺物ともに酷似した例が、近接した左京三坊十五町の調査でも検出されており、墓とされている。今回の調査においても、人頭大礫の中には五輪塔の一部と考えられるものもあり、この土坑は墓であった可能性がある。



第３図　調査地平面図(1/150)



第４図　ＳＫ130出土白磁(1/4)

土坑(ＳＫ54)　ＳＸ24の北隣りで検出したもので、ＳＸ24よりひとまわり大きく、短辺2.0m・長辺2.8mを測る長方形の土坑である。中央部やや東寄りで多数の土師器皿が出土した。ＳＸ24とほぼ同時代と考えられるが、規模の違い、遺物の出土状況の違いなどから、ＳＸ24とはその性格を異にすると考えたい。

③中世以降

石敷(ＳＸ39)　調査地の南壁下で検出した。長さ40cm・幅30cmほどの扁平な石数個と小礫を東西方向に敷いたもので、検出全長は約1.5m、幅は約50cmである。

石敷(ＳＸ45)　調査地のほぼ中央部で南北方向に検出したものである。検出全長は約3.5mで、ＳＸ39とほぼ同様の状況で検出した。調査地南壁下でＳＸ39と直交すると考えられ、ＳＸ39・ＳＸ45は方形になんらかの区画を形づくる、一連の遺構であろう。

土坑(ＳＫ03)　一辺約2.0m、検出面からの深さ約70cmを測るほぼ正方形の土坑である。調査地西壁の南側直下で検出した。織部焼、志野焼、唐津焼、備前焼、天目茶碗などの茶器・花器類がまとまって出土した。

３．まとめ

現時点ではまだ充分な整理作業を行っていない段階であり、事実誤認等も多々あると思われるが、今回の調査では、当地における土地利用の変遷について、わずかながらもその一端を知りうる資料が得られたと考える。

たとえばＳＫ130やＳＫ146などからは、土師器皿等の日常雑器とともに、緑釉陶器や灰釉陶器のほか白磁がまとまって出土しており、当地には平安時代後半、比較的身分の高い人の邸宅があった可能性がある。

また、室町時代の「酒屋名簿」を記載した『北野天満宮文書』によると、「高辻烏丸西北頻」に「越後」という酒屋があったことが記されている。中世に商業的繁栄を誇った下京の地に位置する酒屋であるということは、一定の広さを持つ屋敷地であった可能性がある。ＳＸ24・ＳＫ54等は、この酒屋「越後」と何らかの関わりを持つ遺構かもしれない。

今後、調査概要の作成をするにあたって、さらに検討を加えていきたいと思っている。

（たけした・しろう＝当センター調査第２課調査第２係調査員）

平成８年度発掘調査略報

17. 中海道遺跡第42次(3NNKAN-42)

所 在 地　向日市物集女町御所海道・中海道

調査期間　平成８年10月28日～平成９年２月27日

調査面積　約455m²

はじめに　今回の調査地点は、向日市物集女町御所海道・中海道地内にある。中海道遺跡は、標高約90mの向日丘陵東側斜面裾部に形成された段丘上に位置する集落遺跡である。遺跡は、東西約500m・南北約400mに広がり、弥生時代から近世まで断続的に形成された複合遺跡である。

中海道遺跡は、これまで当センターや向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センターなどが発掘調査を実施した。第１次・第17次調査では、溝から弥生時代後期末頃の一括資料が出土し、乙訓地域の後期の弥生土器編年を補強する資料として注目された。韓式土器(第３次調査)や初期須恵器の出土数が多く(第17次調査)、古墳時代のこの集落の先進性が指摘された。(財)向日市埋蔵文化財センターが実施した第32次調査では、弥生時代終末から古墳時代初頭の集落の一画が検出され、この時期に建造された棟持ち柱を持つ大型掘立柱建物跡が見つかった。この建物跡は、この時期に中海道遺跡が乙訓地域で重要な集落であったことを示す遺構として注目されている。

今回、中海道遺跡地内で、広域幹線アクセス街路整備工事が計画されたため、当調査研究センターでは京都府乙訓土木事務所の依頼を受け、発掘調査を実施した。

調査概要　調査地区は４地点あり、南から第１区・第２区・第３区・第４区と名付けた。表土などを重機で除去した後、人力で精査した。この作業に応じ、適宜、写真撮影や遺構実測を行った。第３・４区では、削平のため遺構が検出できなかったので、第１・２区を中心に報告する。

(1)第１区　この地区は、大半が攪乱を受けており、遺構の遺存状況はよくなかった。竹杭を伴う近代の溝・土坑・ピットなどを検出した。

土坑は、東西径約１m・深さ約0.5mの楕円形で、素掘りの土坑である。埋土第２層上面で15世紀後半頃の土師器皿８枚が出土した。土師器には、京都産と地元産がある。ピットには弥生時代後期の土器を含むものがある。

第１図　調査地位置図(1/25,000)

(2)第２区　竪穴式住居跡・土坑・柱穴などを多数検出した。竪穴式住居跡は３基(ＳＨ01～03)を検出した。ＳＨ01は、一辺５m前後の古墳時代後期の隅丸方形竪穴式住居

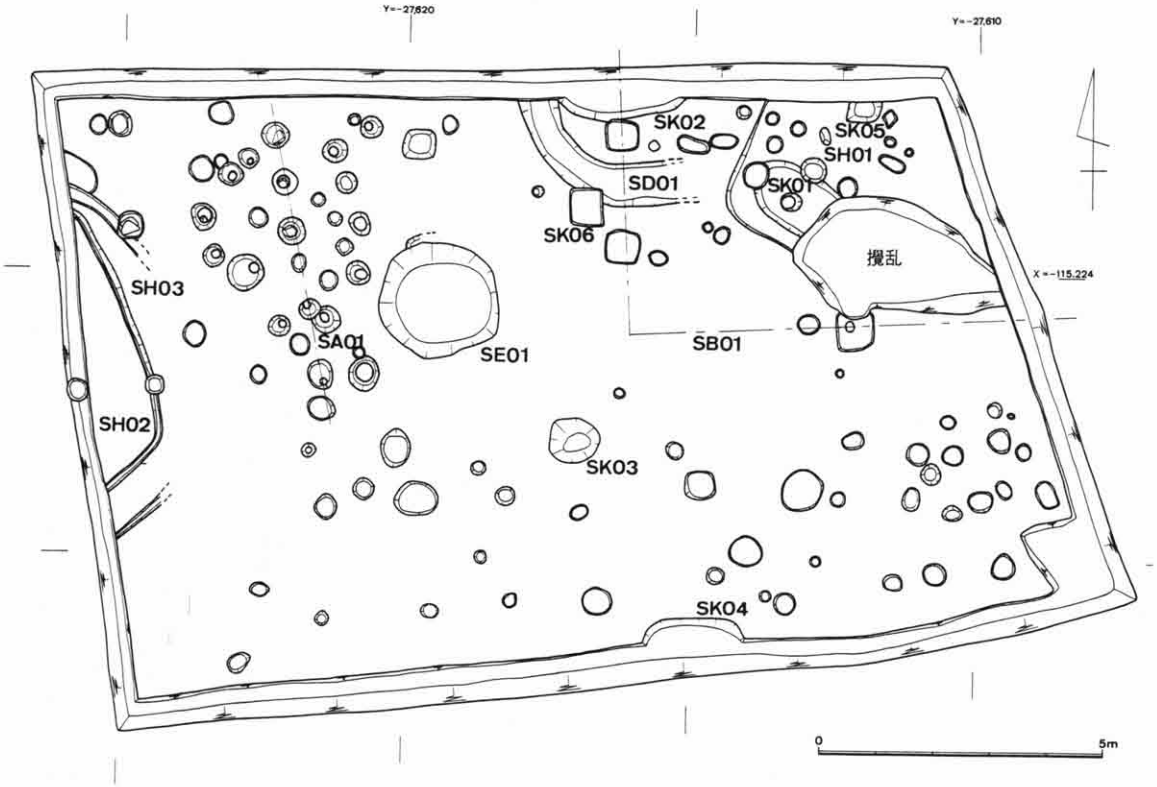
跡である。南西部分の一部を検出した。須恵器杯身・高杯・鉢・土師器高杯などが出土している。ＳＨ02は、円形竪穴式住居跡である。周壁溝のみを検出した。中海道遺跡第34次調査で検出した竪穴式住居跡（ＳＨ201）の東部分にあたると考えられる。直径８ｍ前後の規模がある。ＳＨ03は、ＳＨ02に重複して建てられた一辺６ｍ以上の隅丸方形の竪穴式住居跡である。埋土から、弥生時代後期の壺・甕・高杯・鉢などの土器片が多数出土している。このほか、掘立柱建物に伴うとみられる柱穴が多数出土している。柱穴には、円形と方形のものとがある。

まとめ　今回の調査では、上述のように、弥生時代後期から中世の遺構や遺物を検出することができた。調査地は、第17次・第34次調査地区の中間に位置しており、それぞれ同様の時期の遺構や遺物が検出されている。これらの成果から考えると、弥生時代後期と古墳時代中期末～後期前半頃を中心とする時代に、この周辺に集落が広がっていたことが明らかとなった。

①弥生時代の竪穴式住居跡からは、後期後半～末頃の土器が出土しており、第32次調査で確認された弥生時代後期末～古墳時代初頭頃の住居跡群との関連が注目される。

②古墳時代の竪穴式住居跡は、第17次調査で検出された古式の須恵器を含む遺構などとの関連がうかがえる。今回、竪穴式住居跡を検出したことで、この地に近接した地点に古墳時代中期末頃から後期初頭頃の居住域があったことが判明した。

③第17次調査で平安時代らしき瓦片が散発的に出土し、近接して瓦葺き建物跡の存在が推測された。今回も類似の平瓦数点が出土した。第２区で時期不明の一辺約60cmの方形掘形の掘立柱建物跡（ＳＢ01）を一部確認した。こうした建物が瓦を伴っていたのかもしれない。　（田代　弘）



第２図　第２区検出遺構

18. 長岡京跡左京第385次(7ANVKN-9・10)

所 在 地　京都市南区東土川町金井田・正登

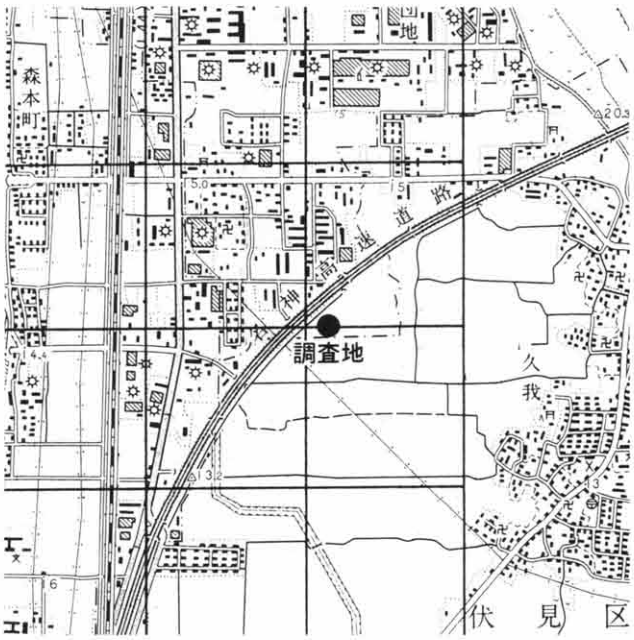
調査期間　平成８年４月８日～平成９年２月27日

調査面積　約9,020㎡

はじめに　中央自動車道西宮線(名神高速道路)の大阪茨木インターチェンジから、京都南インターチェンジ間における慢性的な交通渋滞解消のため、日本道路公団では、走行車線の拡幅工事を行い、桂川パーキングエリアの建設を計画された。本調査は、この名神高速道路桂川パーキングエリア建設に伴う事前調査であり、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて実施した。平成６年度以降、パーキングエリア予定地内を都合８分割し、４か年をかけて調査を継続している。

調査概要　調査区は、桂川パーキングエリア予定地の南東部分にあたる。長岡宮の東にあり、旧来の条坊案では、左京南一条四坊五町南西部と、南一条大路を隔てた南側の左京二条四坊八町北西部にあたる。山中　章氏の新条坊案では、二条四坊六・七町にあたり、中央で東西方向に位置する大路を二条条間大路とする。調査区の全域で東西方向と南北方向に掘削された13～14世紀の素掘り溝を多数検出した。溝の方向の違いは、条里の坪土地割りの違いを反映すると考えられる。長岡京条坊関連遺構では、南一条大路の南北両側溝と路面(写真１)、東四坊第１小路両側溝を検出した。南一条大路と東四坊第１小路の交差点では、大路の側溝が小路を横断する、いわゆる条型となっており、大路通行が優先されていたようである。

南一条四坊五町では、本調査区の北側に隣接する地区の調査を平成６年度に行っており(左京第337次調査)、一町の中心やや西側で、２間×７間と２間×５間の東西棟の掘立柱建物跡を検出した。今回は、２間×５間の身舎に北・東・南三面廂を持つ東西棟の掘立柱建物跡を検出した。北側に位置する２間×７間の東西棟と西妻柱筋をそろえることから、主殿と後殿と考えられる。また、南一条大路北側溝から100尺の地点で、東四坊第１小路に開く門跡と考えられる２基の柱穴を検出した。このほかにも２間×３間の東西棟など、小規模な雑舎と考えられる掘立柱建物跡を検出した。



調査地位置図(1/25,000)

写真１　南一条大路(西から)

写真２　ＳＴ619木棺内石剣・石鏃出土状況(南西から)

二条四坊八町では、一町の北西ほぼ四分の一区画が調査対象地にあたる。南一条大路に面して２間×５間の身舎に南廂をもつ東西棟と、その南側に主軸をそろえた２間×５間の東西棟の掘立柱建物跡が位置する。また、調査区東側に２間×５間の南北棟と、南西側に２間×３間の身舎に北廂をもつ東西棟の掘立柱建物跡を検出した。その他、調査区東辺で、南北に蛇行する大溝を検出した。幅約５ｍ・深さ約1.6ｍ以上で南一条大路両側溝と切り合い関係をもたないため、大路を縦断していたと思われる。平成６年度、東側隣接地で行われた調査(左京第334次調査)では、「九月九日□米□二升里米三升『四日出来事』」と釈読される文書様木簡や、土馬・人形などの祭祀遺物、土師器・須恵器などが出土した。この大溝の北西約１kmの左京一条三坊六町・十一町付近では、北西から南東方向の大規模な流路が検出されており(左京第203次調査)、葛野大井津から京内に引き込む運河とされる。今回調査した大溝も、その一支流として長岡京期に開削された堀川と考えられる。

長岡京期以前の遺構として、５～７世紀の遺物を包含する数条の自然流路や溝がある。調査区の北半で検出され、すべて北西から南東方向に流下する。５世紀の流路や溝からは、土師器・初期須恵器・紡錘車など、多様な遺物がみられる。特に、初期須恵器の中には、脚部に菱形の刺突をもつ高杯や鉢形の器台など、陶質土器と弁別しがたいものもある。

弥生時代中期の遺構には、環壕の一部と考えられる「Ｖ」字に掘削された溝や流路、一辺が10ｍを越す大形の方形周溝墓などが検出された。流路からは、第Ⅳ様式の土器や磨製石剣の鋒部・打製石剣などが出土した。北西から南東方向に連接して検出された方形周溝墓群は削平が著しく、中心主体部は遺存しなかったが、周溝内に木棺が埋葬されているものがあり、被葬者の腹部と思われる部位から、いわゆる鉄剣形磨製石剣の鋒５点・剣身１点・打製石鏃10点以上が集中して出土した(写真２)。戦闘による死者か、方形周溝墓中心主体部の被葬者に対する宗教的供犠かは意見が分かれる。

(野島　永)

19. 長岡京跡右京第547次(7ANGTE-3・GKN-2)

所 在 地　長岡京市井ノ内上印田・西の京
調査期間　平成８年10月７日～平成９年２月20日
調査面積　約1,100m²

はじめに　今回の調査は、外環状線緊急街路整備事業に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。今回の調査地は、新条坊による長岡京跡の条坊推定地では、西二坊大路及び二条条間大路との交差点部分に当たる。過去の周辺地域の調査では、西二坊大路東側溝や路面の轍などが見つかっている。中でも、今回の調査地と同じ台地上(現在の長岡第十小学校グラウンド)では、長岡京期から奈良時代にかけての時期の大規模な建物跡が見つかっている。また、時代はさかのぼるが、弥生時代前期には、上里遺跡といった集落が営まれていた場所に隣接する立地でもある。なお、今回は、遺構掘削・測量作業終了後、埋め戻し作業を行って発掘調査を終了した。

調査概要　調査地は、北と南の２か所に分かれている。これらは調査の便宜上、北側の調査地を北地区、南側を南地区とした。なお、北地区は排土処理の都合上、２回に分けて調査を行った。

(1)基本層序　調査地の層序は、基本的に耕作土の上に盛り土があった。耕作土の下は、もとの水田部分には床土が見られた。この床土の下が中世～近世の包含層となっていた。この包含層は、調査地の周辺地形が西側が高く、東側に行くにしたがって低くなっているため、調査地の東側ほど堆積層が厚い傾向にあった。遺構検出面は、中世の遺構面が灰褐色粘質土、古墳から弥生時代の遺構面は暗茶褐色粘質土であった。しかし、北側に行くほど暗茶褐色粘質土が消失し、下層堆積土である灰褐色粘質土に変化する。この灰褐色粘質土に対応する層は、南側では灰緑色粘質土となる。この層は無遺物層である。

(2)検出遺構

①北地区　検出遺構には、中世・奈良時代・古墳時代・弥生時代前期・後期の遺構がある。以下、その中で主なものに触れる。

A．**中世の遺構**　溝跡９(ＳＤ54709)は、南北方向の地境溝で、座標北から西側に振る。延長約76mにわたって検出した。溝の規模は、最大幅約1.2m・深さ約0.15mを測る。南側の拡張部分で検出した南北方向のピット列は、この溝に伴うと思われる。埋土中から丸瓦片１点、須恵器杯・壺などが出土した。

調査地位置図(1/25,000)

B．**奈良時代の遺構**　柱穴30は、拡張区で検出した、径約0.15mを測る穴である。溝跡９に伴うピット列とは並びが異なるため、関連がないと思われる。埋土中から、土師器の墨書土器とともに萬年通寶・神功開寶と文字不明なものの、計３枚の銭貨が銹着した状態で出土した。

C．**古墳時代の遺構**　井戸跡18(ＳＥ54718)は、直径約２ｍ・深さ約1.1mを測る素掘りの井戸である。埋土中から土師器の高杯３点、緑色凝灰岩製の管玉１点や、井戸の底部からは先端を尖らせた棒が１本出土した。出土した土器から、井戸跡の年代は古墳時代中期と思われる。出土した高杯や管玉などは祭祀遺物と考えられる。関連は不明であるが、溝跡16は井戸跡18の排水用の溝の可能性がある。

D．**弥生時代の遺構**　土坑３(ＳＫ54703)は、南北に長い不整形の土坑である。長さ約5.5m・幅約1.3m・深さ約0.25mを測る。埋土は、暗灰色砂質土である。埋土上面から土師器壺などが出土した。時期は、弥生時代後期(畿内第Ｖ様式)と思われる。また、流路跡13・14・15(ＳＤ54713・54714・54715)は、北西－南東方向の流路跡である。中でも、流路跡15は規模が大きく、最大幅約2.3m・深さ約1.1mを測る。いずれの埋土も砂礫であり、埋土中に、弥生時代前期の土器を含んでいた。流路は、傾斜から見て、北西から南東方向に流れていたと思われる。また、土器の流路への混入状況から、集落の中心は、西側に存在していたと考えられる。

②**南地区**　上層遺構(中世)と下層遺構(弥生時代前期)がある。上層遺構は、溝跡及び柱穴がある。柱穴には柱根が残存するものも見られた。下層遺構は、弥生時代前期の土器を含む北東－南西方向の自然流路跡がある。

(3)**出土遺物**　瓦質土器・瓦器・須恵器・土師器・弥生土器・石庖丁・緑色凝灰岩製管玉・軒瓦・銭貨などが出土した。遺物の量は、整理箱２箱分である。資料としては破片資料ばかりで、完全なかたちとなるものは見られない。

まとめ　①今回は明確に長岡京期の遺構となるものは、確認できなかった。
②弥生時代前期の土器が少量出土しており、隣接する上里遺跡との関連がうかがえる。特に、流路跡15は、集落内の区画溝的な性格が考えられる。集落内での位置関係は、北東縁辺部にあたると思われる。

(柴　暁彦)

20. 菟道遺跡・西隼上り遺跡

所 在 地　宇治市菟道出口・森本地内

調査期間　(菟道遺跡)平成８年11月25日～12月20日

(西隼上り遺跡)平成８年12月13日～平成９年２月13日

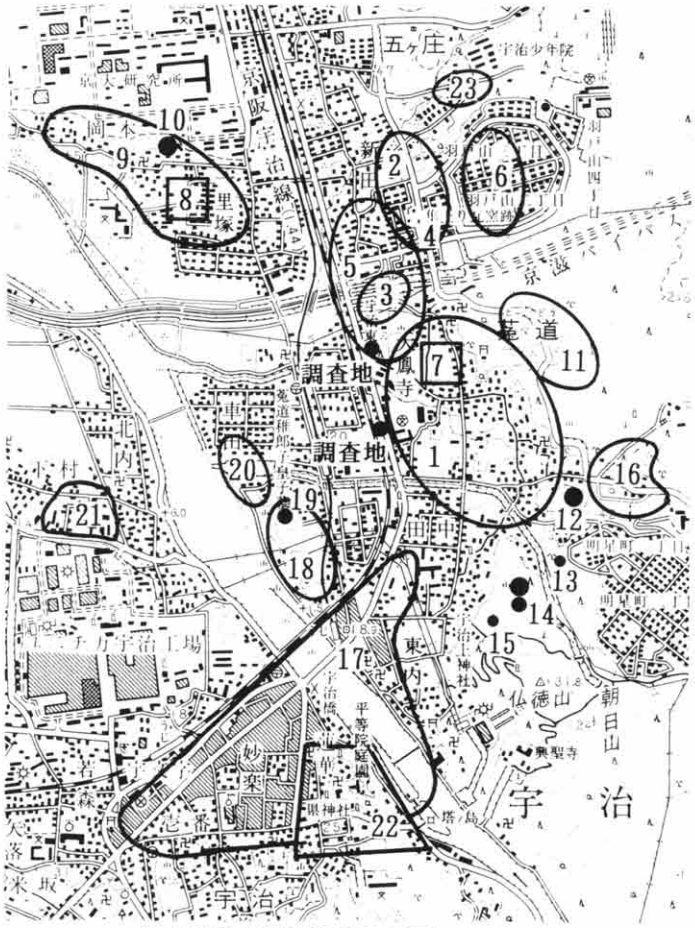
調査面積　(菟道遺跡)約360㎡(うち試掘130㎡)

(西隼上り遺跡)約125㎡　　合計約485㎡

はじめに　今回の調査は、府道京都宇治線の街路改良事業に伴って、京都府宇治土木事務所の依頼を受けて実施した。調査対象地は、府道沿いの南北２か所で、北の調査地は西隼上り遺跡の範囲に含まれ、南の調査地は菟道遺跡の隣接地にあたるため、工事に先だち遺構・遺物の埋没状況を把握するための試掘調査を行うことになった。

菟道遺跡は、『宇治市における史跡・名勝・埋蔵文化財等所在概要図』によれば、府道京都宇治線の東側で宇治川右岸の段丘～段丘斜面に営まれた、南北約700m・東西約500m範囲に広がる遺跡と推定されている。宇治市教育委員会による近年の発掘調査で、古墳時代の竪穴式住居跡群と古墳群、飛鳥時代から平安時代の建物跡群や区画溝などが検出された。そして、飛鳥～平安時代の遺物に官人(役人)が身に付ける帯金具や風鐸の一部・隆平永寶などがあり、古代官衙があった可能性が推定されている。遺跡の範囲内に飛鳥時代創建の大鳳寺跡も含まれる。

西隼上り遺跡は、かつて弥生時代の石庖丁が採集されたと伝えられる遺跡である。今回の調査対象



調査地及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

1. 菟道遺跡　2. 隼上り遺跡　3. 隼上り古墳群　4. 隼上り窯跡群
5. 西隼上り遺跡　6. 羽戸山遺跡　7. 大鳳寺跡　8. 岡本廃寺
9. 岡本遺跡　10. 瓦塚古墳　11. 東中遺跡　12. 池山古墳
13. 妙見山古墳　14. 二子山古墳　15. 山本古墳　16. 三室戸寺子院群跡
17. 宇治市街遺跡　18. 乙方遺跡　19. 菟道稚郎子墓　20. 三室津推定地
21. 槙島城跡　22. 平等院旧境内遺跡　23. 一番割遺跡

地の北方で当センターが実施した調査で、古墳３基(隼上り古墳群)、柱穴群・土坑群・溝などを検出した。西隼上り遺跡は、宇治川右岸の段丘～段丘斜面に営まれた、南北約550m・東西約300mの範囲に広がる遺跡と推定されている。遺跡の南部は、菟道遺跡と重複する。また、菟道遺跡と関連するが、調査地の南東で宇治市教育委員会が近年実施した発掘調査で、古墳時代の竪穴式住居跡群・埴輪窯、白鳳～奈良時代の掘立柱建物跡群が検出された。菟道遺跡・西隼上り遺跡の周辺には、南に二子山古墳・妙見山古墳・山本古墳・山本瓦窯跡・宇治市街遺跡など、北に隼上り遺跡・隼上り瓦窯跡・羽戸山遺跡などがあり、宇治市内でも重要遺跡が密集する地域である。

調査概要　菟道遺跡の調査は、府道京都宇治線西側の調査対象地内で、南北２か所で重機による試掘を行ったところ、約３mの造成盛り土があり、湧水もあった。湧水による掘削壁面の崩落が著しく、下層の掘削は危険と判断して現況写真を撮影した後、ただちに埋め戻した。その後、中央部で盛り土層に傾斜をゆるく付け、下層の掘削を実施した。調査トレンチ中央には宅地であったときのコンクリート基礎が厚く残存したため、トレンチを南北に分けた。南トレンチでは、旧耕作土・床土の下で粘質土やシルト層がわずかに見られるが、それより下層は砂・砂礫層が堆積し、流路跡と推測された。北トレンチも旧耕作土・床土の下は、一部で粘質土やシルト層が南より厚い場所があり、柱穴と推定できるものが見られたが、流路跡と推定される砂や砂礫が厚く堆積する。砂礫層などから古墳時代～奈良・平安時代の遺物が出土した。

西隼上り遺跡の調査では、府道京都宇治線東側の調査対象地内で２か所を試掘したところ、表土から約0.8m下の暗灰褐色土で土器細片を採集した。土器が出土した深さまで重機で掘り下げた。ここでは、１か所で土器を確認したが、周辺には遺物もほとんどなく、遺構と推定できるものは検出しなかった。掘り下げると、暗茶褐色土・灰褐色土、砂礫・砂礫混入土などが互層となり、遺物も出土しないため、安定した地盤(暗褐色土)まで重機で掘削した。暗褐色土面で1.2m×1.3mの方形土坑１か所を検出したが、出土遺物がなく時期は不明である。この土坑底面が湧水層に到達しているので、井戸の可能性がある。北壁中・下層では、茶褐色砂質土・黒褐色土(砂礫混入)が堆積し、その下に砂質土や砂礫・砂層があり、それらを抉り込むように礫層が混入する。東壁でも同様な堆積状況がみられるので、河川堆積による沖積地と判断した。

まとめ　菟道遺跡の調査で、古墳時代～奈良・平安時代の遺物を含む流路跡を検出し、出土遺物から、平安時代前期まで川であったことが判明した。安定した地盤となる時期は、それよりも遅れると推定されるので、段丘を中心とする菟道遺跡には含まれないと判断できる。床土に遺物を含まないので、水田などの土地利用が開始された時期は不明である。

西隼上り遺跡の調査では、土坑１か所の検出と、上層で少量の遺物が出土したにとどまった。中・下層には砂礫混入土や砂質土・砂礫層が厚く堆積するのが確認できた。これらから、この地は調査地北方を東から西へ流れる川、現在は天井川となっている大鳳寺川が形成した沖積地で水田には適さない場所であることが判明した。狭い調査範囲の資料から判断するのは早計であるが、出土遺物は少なく、顕著な遺構がみられないので、周辺とは異なり、人が生活した形跡は薄いといえよう。今後、周辺での調査が期待される。　（石尾政信）

21. 西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡

所 在 地　(西ノ口遺跡)八幡市美濃山西ノ口他
(宮ノ背遺跡)八幡市美濃山宮ノ背

調査期間　(西ノ口遺跡)平成８年10月15日～平成９年２月27日
(宮ノ背遺跡)平成８年11月14日～平成９年２月27日

調査面積　(西ノ口遺跡)約580m²
(宮ノ背遺跡)約380m²

はじめに　今回の発掘調査は、一般地方道富野荘八幡線(山手幹線)の道路建設に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。この道路は、京都府南部を縦断する木津八幡線のバイパス道路として計画され、当センターでも過去数か所の調査を実施している。今回、調査を実施した西ノ口遺跡は、東西300m・南北200m、宮ノ背遺跡は、東西130m・南北90mの広がりを有している。両遺跡は、男山丘陵から南へのびる美濃山の丘陵地に立地し、ともに弥生時代から古墳時代の遺物散布地として登録された周知の遺跡である。周辺には弥生時代から古墳時代にかけて多くの遺跡の存在が確認されている。丘陵の西側は、大阪府枚方市に接し、旧山陽道や洞ヶ峠を越える東高野街道が通っており、北河内や淀川流域に通じる古代からの交通の要衝でもある。

西ノ口遺跡

調査概要　調査対象地が東西にのびるため、２か所にトレンチを設けて調査を開始した。東側に設けた第１トレンチでは、残存状況は悪いが、弥生時代後期の円形竪穴式住居跡１基を検出した。また、第２トレンチでは、0.3～1.8mの盛り土層の下に弥生時代中期後半～後期の包含層が堆積しており、その下から溝２条・土坑５基・ピット30基ほど検出した。溝・土坑は、いずれも弥生時代後期を中心とする時期と考えられる。第１トレンチのほぼ中央で検出した住居跡は、東側1/3ほどが後世の削平で失われていたが、復原直径は約10.1mを測る。検出面から深さ0.3mほどが遺存しており、床面で周壁溝・主柱穴・炉を検出した。主柱穴は、遺存部分では６か所確認することができ、本来は８か所あったと考えられる。中央部で検出した炉跡は、1.6m×1.2mの楕円形を呈し、幅0.3mを測る溝が西方へのびる。

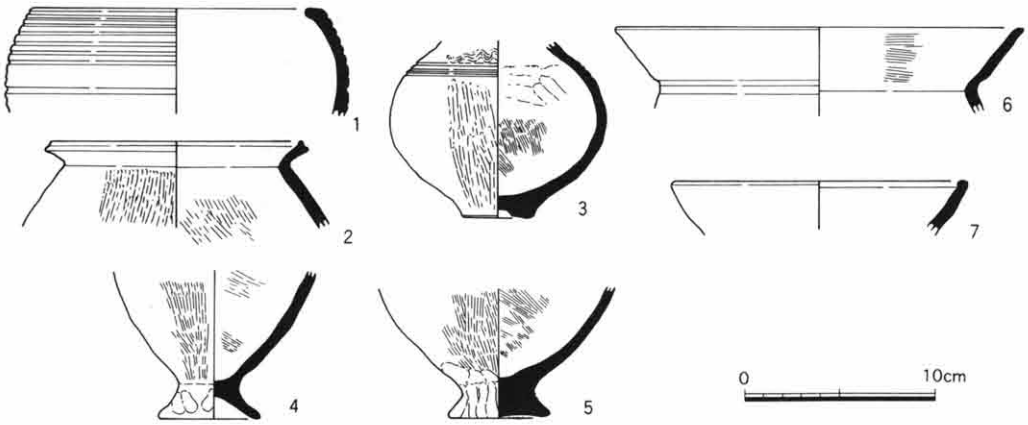
第１図　調査地位置図(1/25,000)

宮ノ背遺跡

調査概要　若宮八幡宮の鎮座する丘陵上に、谷を挟んで東西２つのトレンチを設けて調査を開始した。西側に設けた第１トレンチでは、竪穴式住居跡を２基と土坑１基を検出した。第２トレンチでは、竪穴式住居跡と土坑を１基ずつ検出した。第１トレンチのほぼ中央部で検出した住居跡１の平面プランは、円形に近い隅丸方形で、長軸5.9m・短軸5.5mを測る。検出面から深さ約0.3mが遺存し、床面で周壁溝・主柱穴・炉跡を検出した。周壁溝は、全周し、南東部で住居の外側、斜面を下る方向へとのびる。主柱穴は、４か所確認され、直径は0.3m前後を測る。東側に入口を設ける。同じく北西部で検出した住居跡２は、調査区内に全体の60％ほどがかかるのみで、全容は不明であるが、一辺5.6mの方形と考えられる。検出面から深さ0.2mほどが残っており、周壁溝を検出したが、南東辺で一旦途切れ、全周しないと考えられる。主柱穴は２か所で確認できた。また、約0.2mの住居跡の拡張を行った痕跡も認められる。住居跡１と住居跡２は、弥生時代後期中葉～後葉の近接する時期にそれぞれ建てられ、住居跡１が先行すると考えられる。第２トレンチで検出した住居跡３は、一辺約5.8mの方形と考えられるが、調査区内には全体の40％ほどがかかるのみである。主柱穴は２か所で検出したが、周壁溝は西半部でしか検出できなかった。

まとめ　西ノ口遺跡は、これまで遺物散布地とされてきたが、今回の調査で竪穴式住居跡を検出したことで、弥生時代後期には集落が営まれていたことが判明した。また、調査地は西から東へとゆるやかに傾斜する斜面の東端に位置し、集落の本体は西側に広がると推測される。宮ノ背遺跡の第１トレンチで検出された住居跡は、北東に張り出した丘陵の先端部に位置し、集落の本体は西側に広がっていると推測される。この遺跡は、標高40m前後を測る丘陵の先端部に占地し、眼下に山城地域一帯を見渡すことが可能な高地性集落としては絶好の立地にあり、この時期、近畿地方各地に同様の集落が増加する状況と軌を一にしている。このことは、当時の社会情勢を敏感に反映したと考えられる。

（奈良康正）



第２図　宮ノ背遺跡出土遺物実測図
1～5.弥生土器　　6・7.土師器

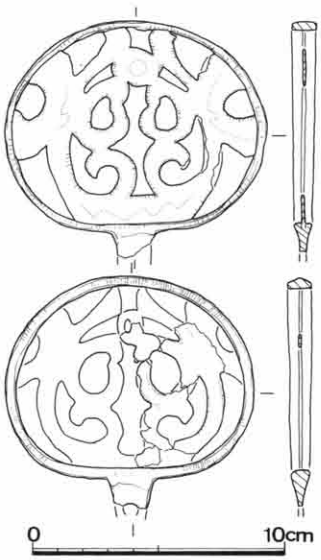
誌 上 遺 物 展 示

1．京都府丹後町高山12号墳出土双龍環頭大刀

概要　『日本書紀』の天智3(664)年2月に、冠位の規定に続いて、「大氏、小氏、伴造等の氏上に、それぞれ大刀、小刀、楯・弓矢を賜う」ことが定められる。いわゆる甲子の宣である。だが、武器を下賜して位階を認定することは、それよりはるか以前にさかのぼる。『魏志倭人伝』には、卑弥呼の遣使に対して、「五尺刀二口」が魏帝より与えられ、5世紀後半の築造になる千葉県稲荷台2号墳では、「王賜」銘の鉄剣がある。また、奈良県東大寺山古墳の「中平□年」銘鉄刀や、埼玉県埼玉稲荷山古墳の「辛亥年」銘鉄剣も、下賜刀の可能性が高い。このように、古墳時代には身分表象のための下賜刀があったらしい。ところで、なぜ武器が下賜されるのか？武器は人間を殺傷するものであると同時に、敵を威嚇し身を護るものである。護身として、さらには武威としての性格が強調され、それが最も視覚的に表現されたものが、古墳時代の装飾付大刀である。

武器の役割を失った大刀は、通常の木装大刀とは異なる華美な装飾が付けられた。特に、柄頭の部分に多様性が発現され、環状に造作した環頭大刀、帽子状の柄頭を被せた円頭大刀、握り拳のような頭椎大刀などがある。このうち、環頭大刀は、漢代に系譜が求められ、わが国では弥生時代中期に登場する素環頭大刀・刀子が舶載の初現であるが、弥生時代の素環頭大刀と古墳時代の素環頭大刀では、環頭の作りが異なる。5世紀には朝鮮半島の百済・新羅・伽耶などで多様な環頭大刀が製作され、それが断続的に流入する。丹後町産土山古墳では環頭の両端を環内に巻き込んで、二葉文を表現したものがある。さらに、6世紀になると、環内に龍や鳳凰を表わし、環頭全体を鍍金したものが登場する。そのうち、一体の龍(鳳凰)を持つものを単龍(凰)大刀、一対の龍(鳳凰)を持つものを双龍(凰)大刀と呼ぶ。

ここで紹介する双龍大刀(右図)は、昭和62年に当センターが発掘調査を実施した丹後町徳光に所在する高山12号墳の石室内から出土したものである。この古墳は、13基からなる高山古墳群の中で、石室規模が最も大型である。同型式のものが2点出土しているが、石室内の片付けに伴う移動のため、いかなる刀身に付けられたかは不明である。元来、朝鮮半島の双龍環頭大刀とは、一対の龍が頸を絡ませ、その胴体が環状を呈し、そこに8本の脚を表現したものであった。ところが、わが国ではこ



双龍環頭大刀実測図

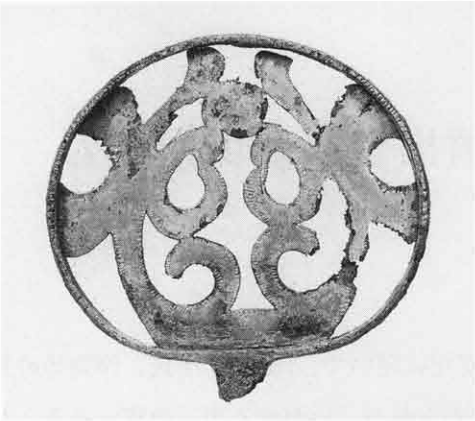


写真１　双龍環頭大刀

のような、本来的な構成を失って大型化し、龍を意識したのかどうかも疑わしいものが多い。本例も、玉を喰わえた形ではあるが、目の表現は無く、退化・簡略化が進んだものである。双龍環頭大刀の中では、最も新しい型式に属するとみることができ、製作年代は７世紀初頭に当てることができる。なお、本資料は、当センターのシンボルマークの原型である。

意義　双龍環頭大刀は、現在までに60例あまりが知られているが、新納　泉氏によれば７型式に編年される。その最も古い型式は、滋賀県鴨稲荷山古墳例であるが、これは環内だけでなく環体外側にも一対の龍が表現され、舶載品と考えられる。ところが、久美浜町湯舟坂２号墳例になると、環体の龍は意味不明の文様と化し、環内の龍の表現も偏平化する。さらに高山12号墳例にいたって、環体の装飾は完全に消滅し、龍の面影も消える。この変遷は、環頭の装飾のみのものだが、佩用のための装具にも変化がある。当初、環頭大刀の佩き方は、多型式の足金具を取り付けた縦佩きのものが主流であったが、７世紀に横佩き２足佩用へと斉一化する。つまり、大刀の吊手を帯前面に装着し、立てて佩用する方法から、帯の左腰側に２足の足金具で大刀を吊る方法へと変化したのである。その背景を、小林行雄氏は、隋唐様式の儀仗用大刀の影響ととらえており、正装のスタイルが刷新されたようだ。

ところで、装飾付大刀を副葬する古墳には、群集墳の盟主的な古墳が多いという特徴がある。後期古墳の階層構成は、石室規模・副葬品の質と量によって規定されるが、その中でも装飾付大刀は極めて限定的な階層にしか見られず、時代的な特質を濃厚に表現した遺物なのである。そこで、双龍環頭大刀の分布に着目して、新納　泉氏は継体天皇擁立に尽力した日本海側勢力の結び付きを、清水みき氏は蘇我氏との関わりを想定した。しかし、他の装飾付大刀も視野に入れると、丹後半島はその分布が稠密な地域の一つなのである。例えば、この高山12号墳（双龍環頭大刀）、湯舟坂２号墳（双龍環頭大刀・圭頭大刀・円頭大刀）のみならず、峰山町桃谷古墳（圭頭大刀・円頭大刀・金銅装大刀）、網野町岡１号墳（単凰大刀）があり、各郡は最低１点以上の装飾付大刀を保有している。このように、大刀の型式差を、直ちに氏族や階層と結びつけるわけにはいかないけれども、丹後半島では、後の評造クラスの首長に装飾付大刀が下賜されるような政治的状況があったのかもしれない。それが、やがては石垣状列石を有する丹後町上野２号墳の被葬者のように、飛鳥時代の官人構成へと組み入られていくのではあるまいか。

（河野一隆）

<参考文献>
奥村清一郎・新納　泉ほか『湯舟坂２号墳』　久美浜町教育委員会　1983

府内遺跡紹介

78. 五塚原古墳

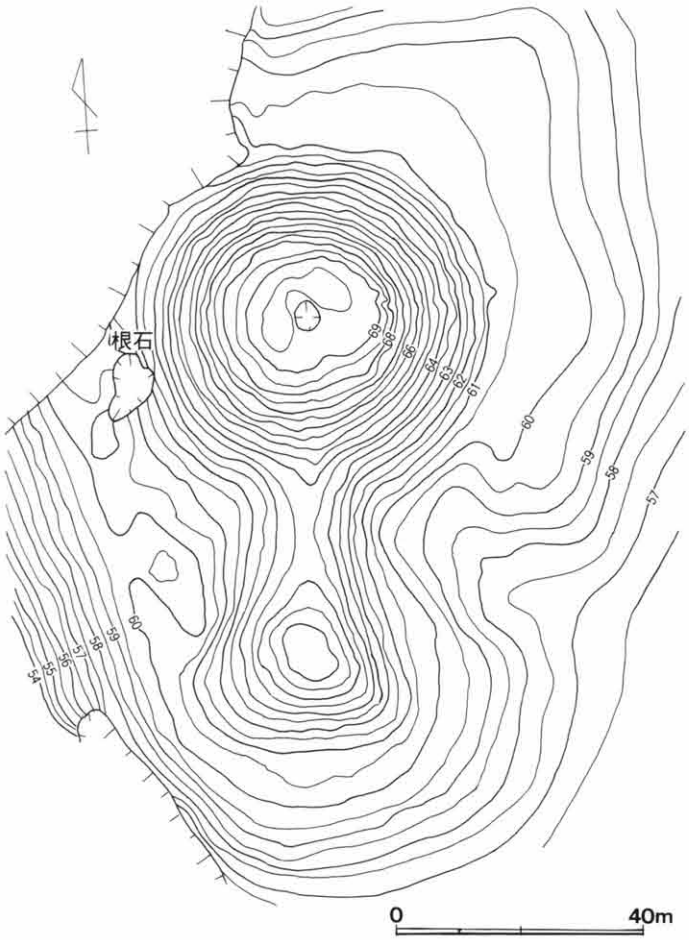
五塚原古墳は、向日市寺戸町大牧大平にある前方後円墳で、まだ発掘調査の行われていない古墳の一つである。場所的には、「はりこ池」と呼ばれている池の西側の丘陵上に位置しており、この丘陵上に築かれた古墳である。古墳の方位は、ほぼ南を向いている。

この古墳は、すでに大正年間に梅原末治氏が紹介して以来[注1]、周知の古墳となっていた。そのときの報告によれば、後円部の中央に窪んだところがあることから、すでに主体部は破壊されたのではないかという推定がなされている。さらに、梅原氏は、それまでにこの古墳の周辺で見つかったと伝えられていた陶棺と石棺についても言及されているが、それらが確実に五塚原古墳から見つかったとする積極的な根拠はあげられていない。その後、具体的な調査はなされないまま、戦後に引き継がれた。

戦後になり、高度経済成長の波が及ぶようになると、今後の遺跡保存の観点から詳細な状況把握が必要となり、測量調査が実施されることになった。測量調査については、1967～8年に京都府教育委員会が実施し、1977年になって京都大学考古学研究室が再調査を行い、墳丘の状況が正確にわかるようになった。また、1968年には帝塚山大学の堅田　直氏によって電気探査も行われている。1967～8年と1977年の測量調査に基づく概要であるが、1967～8年の調査の段階では、すでに後円部の背後の西北部の裾が宅地開発のため崖状に削られはじめていた。ただ、全体的には墳丘が現状を保存しており、その状況は現在でもそれほど変わっていない。墳丘の斜面の角度も、1967～8年の報告では前方部・後円部ともほぼ同じであることから、段築の有無は確認できなかったようである。この時の調査での注目すべき成果は、円筒埴輪の発見である[注2]。この時は、削られた崖面からの出土であるため、どのような状況で円筒埴輪が並んでいたかは不明であるが、担当者は墳丘裾部にめぐっていた状況を推測している。この点は、1968年の堅田氏の電気探査でも同様で、堅田氏は２段の埴輪列があると推定された[注3]。

第１図　遺跡所在地(1/25,000)

一方、1977年になって行われた測量調査の結果、さらにいくつかの点が推定されるようにな



第２図　五塚原古墳測量図(『向日市史』の図を再トレース)

った。[注4] まず、計測した数値であるが、付表１に示したように、1967～8年の調査結果と若干異なる点がある。全長で約８ｍ、特に後円部の直径をどこまでとするかで見解の相違があったように見受けられる。あとは、前方部幅が1977年の調査では、約４ｍ大きく考えられている程度である。

次に、裾部であるが、土取り跡の観察から、後円部最下段で拳大から人頭大の葺石が葺かれていたことが判明した。また、この時の測量調査では、円筒埴輪片が見つからず、1968年の電気探査の結果、２列の埴輪列が存在するとされた堅田氏の推定は確かめることはできなかったようである。

付表１　測量値の比較表

測量調査年次	全長	後円部		前方部	
		直径	高さ	幅	高さ
1967～8年調査	102m	62m	9m	32m	5.3m
1977年調査	94m	54m	8.5m	36m	4m

次に墳丘の規模である。1977年の調査をもとに、和田晴吾氏は、付表２にあるように、墳丘の形態を別にすると、向日丘陵上に位置する３基の古墳は、ほぼ規模が近く、しかも、形態的には箸墓古墳の３分の１の規格で造られたことを推定された。こういったことをもとに、「すでに前方後円墳出現のごく初期の段階において、特定の地域では、前方後円、あるいは前方後方という形態のみならず、少なくともその規模までもがこの企画の中に含まれていた」ことを指摘された。

確かに、近距離にある元稲荷古墳・寺戸大塚古墳・五塚原古墳がほぼ同規模古墳で、形態的にも箸墓の３分の１の規格性を持つとすれば、古墳造営を含めた葬送儀礼に何か共通するものがあったことは否定できない。古墳時代前期の乙訓地域の首長墓が向日丘陵上に営まれたことは間違いなかろう。

ところで、五塚原古墳の内部主体であるが、発掘調査が実施されていないため、詳しくはわかっていない。しかし、堅田氏の電気探査データから、後円部のやや東寄りで、東西15m・南北11mの墓壙があったことが推定されている。また、前方部にも東西５ｍ・南北７ｍの墓壙の存在も

指摘されている。むろん、後円部の中央部には盗掘坑らしき窪みが存在するため、破壊されている可能性がある。

いずれにせよ、発掘調査が実施されておらず、具体的な事実が解明されるのはその後ということになろう。

付表2　五塚原古墳と周辺古墳との規模比較表

	全長	後円(方)部		前方部		くびれ
		径	高	幅	高	部幅
五塚原古墳	94	54	8.5	36	4	18
元稲荷古墳	94	52	7	46	3	22
寺戸大塚古墳	98	54	9.8	45	3	不明

（土橋　誠）

注1　梅原末治「寺戸五塚原付近ノ古墳」（『京都府史蹟勝地調査會報告』第五冊　京都府）　1923

注2　堤圭三郎・高橋美久二「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概要(1968)』京都府教育委員会）　1968

注3　堅田　直「京都府五塚原古墳の電たん調査」『みつがらす』第1号　1968

注4　和田晴吾「向日市五塚原古墳の測量調査より」（小野山節編『王陵の比較研究』）　1981

前方部から後円部を望む

長岡京跡調査だより・61

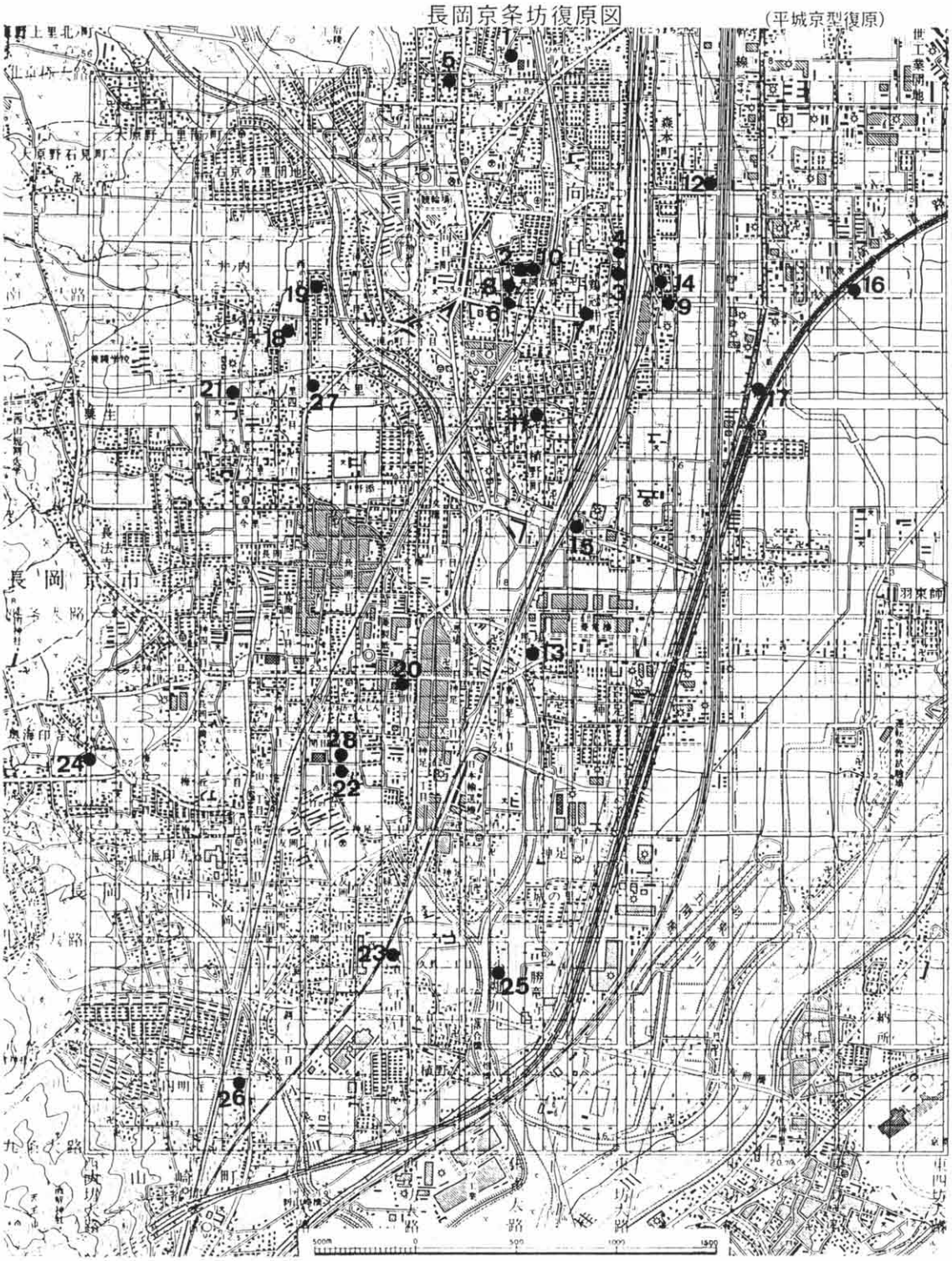
前回『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成９年２月26日、３月26日、４月23日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は宮内10件、左京域７件、右京域11件であった。京外の10件を併せると38件となる(調査地一覧表と位置図を参照)。この内、宝幢遺構の調査結果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1997年４月末現在)

番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第316次 第５調査区	7ANBKD	向日市寺戸町小畑14	(財) 向日市埋文	1/20～1/28
2	宮内第339次	7ANEDN-3	向日市鶏冠井町大極殿40-４	(財) 向日市埋文	1/8～1/21
3	宮内第340次	7ANEOK-3	向日市鶏冠井町御屋敷51・52	(財) 向日市埋文	1/10～2/7
4	宮内第341次	7ANEIB-2	向日市鶏冠井町一ノ坪１-２	(財) 向日市埋文	2/10～3/28
5	宮内第342次	7ANBNC-3	向日市寺戸町中垣内８	(財) 向日市埋文	2/24～2/27
6	宮内第343次	7ANEHJ-3	向日市鶏冠井町祓所41-18	(財) 向日市埋文	3/3～4/26
7	宮内第344次	7ANEHI	向日市鶏冠井町東井戸58	(財) 向日市埋文	3/24～4/7
8	宮内第345次	7ANEDN-4	向日市鶏冠井町大極殿59-２	(財) 向日市埋文	4/2～4/11
9	宮内第346次	7ANEDN-5	向日市鶏冠井町大極殿18-６	(財) 向日市埋文	4/10～4/14
10	宮内第347次	7ANEDN-6	向日市鶏冠井町大極殿40-18他	(財) 向日市埋文	4/14～5/25
11	左京第394次	7ANFMM-6	向日市上植野町円山23	(財) 向日市埋文	1/8～2/10
12	左京第395次	7ANDHC-5	向日市森本町東ノ口16	(財) 向日市埋文	1/27～2/20
13	左京第396次	7ANLKR-2	長岡京市馬場川原17-10	(財) 長岡京市埋文	2/6～3/27
14	左京第397次	7ANEIB-3	向日市鶏冠井町一ノ坪６-３	(財) 向日市埋文	3/10～4/4
15	左京第398次	7ANFDN-4	向日市上植野町大門13-５	(財) 向日市埋文	3/19～3/26
16	左京第399次B-6・B-7	7ANVKN-11 7ANVST-7	京都市南区久世東土川町金井田・正登	(財) 京都府埋文	4/7～
17	左京第400次	7ANEMR-4	向日市鶏冠井町南金村	(財) 京都府埋文	5/上～
18	右京第534次	7ANGSN-4	長岡京市井ノ内下印田24-１	(財) 長岡京市埋文	1/10～2/25
19	右京第547次	7ANGTE-3 7ANGKN-2	長岡京市井ノ内上東ノ口	(財) 京都府埋文	10/7～97.2/13
20	右京第554次	7ANKKN-2	長岡京市開田一丁目121他	(財) 長岡京市埋文	12/9～1/16
21	右京第558次	7ANIHJ-4	長岡京市今里蓮ヶ糸18-９他	(財) 長岡京市埋文	1/13～2/28
22	右京第559次	7ANKDD-3	長岡京市開田四丁目１	(財) 長岡京市埋文	1/20～3/5
23	右京第560次	7ANQNY-2	長岡京市久貝一丁目１-６	(財) 長岡京市埋文	2/3～2/20
24	右京第561次	7ANPIR-2	長岡京市奥海印寺坂ノ尻7-4	(財) 長岡京市埋文	2/10～3/1
25	右京第562次	7ANQMH-2	長岡京市勝竜寺巡り原６-１他	(財) 長岡京市埋文	2/13～3/1
26	右京第563次	7ANSSR-3	大山崎町円明寺里の後４-１	大山崎町教委	2/24～3/24
27	右京第564次	7ANIAC-4	長岡京市今里畔町22-１他	(財) 長岡京市埋文	3/17～4/25
28	右京第565次	7ANKNT-5	長岡京市開田四丁目611-３	(財) 長岡京市埋文	3/17～5/21
29	谷田瓦窯群第４次	7STPTD-2	長岡京市奥海印寺谷田30他	(財) 長岡京市埋文	2/17～4/7
30	久々相遺跡第２次・A区	※AK2： 7AKBKG-2	向日市寺戸町久々相17-２	(財) 向日市埋文	1/8～1/23
31	中海道遺跡第42次	3NNAKN-42	向日市物集女町中海道・御所海道	(財) 京都府埋文	10/28～ 97.2/27
32	中海道遺跡第45次	3NNANK-45	向日市物集女町クズ子地内	(財) 向日市埋文	3/10～3/24
33	中海道遺跡第46次	3NNANK-46	向日市物集女町御所海道２-３、３-６、41-２	(財) 京都府埋文	5/6～

34	大山崎町第24次	7YYMS'HR-2	大山崎町大山崎堀尻6-1・8-1	大山崎町教委	11/5～97.3/18
35	山崎津跡第12次	7ANSNZ	大山崎町円明寺西島20-1	大山崎町教委	1/17～1/28
36	修理式遺跡第5次	3NSBKR-2	向日市寺戸町蔵ノ町19	（財）向日市埋文	2/24～3/6
37	山城国府跡第44次	7XYS'EGI	大山崎町大山崎永福寺12-1他	大山崎町教委	2/28～3/10
38	山崎城跡第1次試掘	7XYS'KGI	大山崎町大山崎古城地内	大山崎町教委	3/12～3/21



番号は一覧表・本文（）内と対応

調査地位置図

宮内第343次(6)

(財)向日市埋蔵文化財センター

長岡京跡大極殿院は、向日市鶏冠井町に所在する。過去、大極殿院跡の発掘調査で、大極殿院北門・北面回廊(1959年・宮内第3次)、大極殿(1960年・第8次)、大極殿院東面回廊(1961年・宮内第9次)、大極殿院南面回廊(1984年・第155次)、大極殿院北面回廊の東部(1985年・158次・165次)の遺構が見つかり、各々調査成果が収められている。今回の第343次の発掘調査では、大極殿院の前庭で新たに宝幢遺構が確認された。これまで文献以外に、宮廷の儀式のようすを実際の遺構を通じて復原できた例はほとんどなく、その実態に迫る重要な遺構として評価された。

この宝幢遺構は、大極殿院の前庭で東西に配列する隅丸長方形の掘形群を指すが、これは大極殿の中軸線上に中心となる掘形を配し、東西各3基、あわせて7基で構成される。今回確認された掘形列は、平城宮第2次大極殿院でも認められており、両者を比較すると掘形の大きさや数、配列する位置、方法などがよく似ている。両者は同じ性格の遺構と見て間違いないだろう。ところで、平安時代の『内裏式』・『延喜式』や『儀式』などでは、この宝幢は天皇の即位の時や元日の朝賀の儀式に立てることになっていた。古代の都城では毎年、元旦には中国風の『幡』を立てて新年を祝っていたことがうかがわれる。

『続日本紀』によれば、長岡宮で最初の朝賀の儀式がとり行われたのは延暦4(785)年のことであるが、そのおりに宝幢が用いられたと見ることは可能であろう。また、『続日本紀』の大宝元(701)年の記事に見える『幡』からも、藤原宮の大極殿の前庭にも宝幢と同じような大規模な施設が建てられた可能性が見えてくる。

いずれにしても、今回の発見によって、藤原宮、平安京などでも、さらに同様の遺構が検出される可能性が高い。大極殿とともにこれらの文化財の保護を検討していく必要が生まれてきた。

(米本光徳)

＜参考文献＞

『長岡宮宝幢遺構―長岡宮跡第343次調査現地説明会資料―』　(財)向日市埋蔵文化財センター　1997.4.5

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織及び職員一覧

（平成９年６月１日現在）

理事長

樋口　隆康

（京都府文化財保護審議会会長･京都大学名誉教授）

副理事長

中澤　圭二

（京都府文化財保護審議会委員･京都大学名誉教授）

常務理事

木村　英男

理　事

川上　　貢

（京都府文化財保護審議会会長職務代理･京都大学名誉教授）

上田　正昭

（京都府文化財保護審議会委員･京都大学名誉教授）

藤井　　学

（奈良大学文学部教授・京都府立大学名誉教授）

佐原　　眞

（国立歴史民俗博物館副館長）

足利　健亮

（京都大学大学院人間･環境学研究科長）

都出比呂志

（大阪大学文学部教授）

井上　満郎

（京都産業大学法学部教授）

堤　圭三郎

栂野　　宏

（京都府府民労働部文化芸術室長）

西山　隆史

（京都府教育庁指導部長）

中谷　雅治

（京都府教育庁指導部文化財保護課長）

監　事

髙田　慶久

（京都府出納管理局長）

京極　隆夫

（京都府監査委員事務局長）

事務局長	木村　英男	
事務局次長	福嶋　利範・安藤　信策	
総務課	課長	福嶋　利範(兼)
	課長補佐	安田　正人
	総務係長	安田　正人(兼)
	主事	杉江　昌乃　今村　正寿
		西村　晃　鍋田　幸世
		西林　紀子
	調査員	橋本　清一
		(府立山城郷土資料館へ派遣)
調査第１課	課長	小山　雅人
	課長補佐	水谷　壽克
	企画係長	水谷　壽克(兼)
	主査調査員	米本　光徳
	資料係長	小山　雅人(事務取扱)
	主任調査員	松井　忠春・土橋　誠
		田中　彰
調査第２課	課長	安藤　信策(兼)
	課長補佐	平良　泰久・奥村清一郎
	調査第１係長	伊野　近富
	主任調査員	竹原　一彦
	主査調査員	竹井　治雄　石尾　政信
		黒坪　一樹
	調査員	河野　一隆　村田　和弘
		松尾　史子
	調査第２係長	辻本　和美
	主任調査員	石井　清司・増田　孝彦
	主査調査員	岡崎　研一
	調査員	竹下　士郎　田代　弘
		野々口陽子　筒井　崇史
	調査第３係長	奥村清一郎(兼)
	主任調査員	引原　茂治
	主査調査員	古瀬　誠三
	調査員	伊賀　高弘　森下　衛
		森島　康雄　有井　広幸
		柴　暁彦
	調査第４係長	平良　泰久(兼)
	主任調査員	戸原　和人
	調査員	岩松　保　小池　寛
		八木　厚之　中川　和哉
		中村　周平　野島　永

センターの動向(9.2～4)

1．できごと

2．4　長岡京跡右京第547次調査(長岡京市)関係者説明会

5　人権に関する職場研修(於：乙訓地方振興局)安田正人課長補佐出席

6　木村英男常務理事・事務局長、長岡京跡左京第385次調査・東土川遺跡(京都市)現地視察

7　佐原　眞理事、長岡京跡左京第385次調査・東土川遺跡現地視察

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(於：大阪市)安藤信策事務局次長、小山雅人課長出席

10　都出比呂志理事、長岡京跡左京第385次調査・東土川遺跡現地視察

13　長岡京跡右京第547次発掘調査終了(10.8～)

西隼上り遺跡(宇治市)発掘調査終了(12.13～)

森垣外遺跡(精華町)発掘調査終了(12.17～)

19　平安京跡(京都市)関係者説明会

20～21　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(於：東大阪市)木村英男常務理事・事務局長、園山　哲事務局次長、安田正人課長補佐、松井忠春主任調査員出席

20　中海道遺跡第42次(向日市)関係者説明会

24　西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡(八幡市)関係者説明会

椋ノ木遺跡(精華町)現地説明会

堤圭三郎理事、椋ノ木遺跡ほか現地視察

25　長岡京跡左京第385次調査・東土川遺跡現地説明会

26　長岡京連絡協議会

浦入西古墳群発掘調査終了(4.16～)

27　中海道遺跡発掘調査終了(10.28～)

西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡発掘調査終了(10.15・11.14～)

内里八丁遺跡(八幡市)発掘調査終了(4.16～)

椋ノ木遺跡発掘調査終了(5.28～)

長岡京跡左京第385次調査・東土川遺跡発掘調査終了(5.20～)

3．1　第78回埋蔵文化財セミナー(於：加茂町)開催(別掲)

2　「スライドでみるおとくにの発掘」講師：竹井治雄主査調査員「長岡京左京二条三坊・二条四坊の調査」

7　浦入遺跡(舞鶴市)発掘調査終了(4.16～)

国際活動団体連絡会議(於：ハートピア京都)小山雅人課長出席

11　平安京跡発掘調査終了(11.5～)

14　職員研修(於：当センター)講師：堤圭三郎理事「発掘調査と遺跡の保存」

近畿ブロックOA委員会(於：京都市)土橋　誠主任調査員出席

22　亀岡市文化資料館文化財講座(講師)野々口陽子調査員「前方後円墳の出現」

24　第49回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)樋口隆康理事長、中澤圭二副理

事長、木村英男常務理事、川上　貢、上田正昭、藤井　学、足利健亮、堤圭三郎、栂野　宏、武田　暹、中谷雅治の各理事、高橋義男監事出席

26　長岡京連絡協議会

30　退職職員辞令交付(別掲)

31　退職職員辞令交付(別掲)

4．1　理事、監事就任(別掲)

新規採用職員辞令交付(別掲)

8　長岡京跡左京第399次調査・東土川遺跡(京都市南区久世)発掘調査開始

14　天王山古墳群B支群(久美浜町)発掘調査開始

浦入遺跡(舞鶴市)発掘調査開始

15　内里八丁遺跡(八幡市)発掘調査開始

16　愛宕神社古墳群(弥栄町)発掘調査開始

23　長岡京連絡協議会

2．普及啓発活動

3．1　第78回埋蔵文化財セミナー(於:加茂町)－南山城・古代から中世へ－奥村清一郎課長補佐「南山城の最新発掘成果について」、森下　衛調査員「八幡市・内里八丁遺跡の発掘調査について」、森正京都府文化財保護課技師「加茂町・恭仁宮跡の発掘調査について」

3．人事異動

3.30　奈良康正調査員退職(京都府教育庁へ)

31　武田　暹理事、高橋義男監事、吉田三枝子監事退任

園山　哲事務局次長兼総務課長退職(京都府立北嵯峨高等学校へ)、津村正樹調査員退職(京田辺市立大住中学校へ)、大岩洋一調査員退職(京都府教育庁へ)

4．1　西山隆史理事、髙田慶久監事、京極隆夫監事就任、理事長をはじめ他の理事は再任

福嶋利範事務局次長兼総務課長採用(京都府教育庁から)、米本光徳主査調査員採用(城陽市立青谷小学校から)、中村周平調査員採用(八幡市立第三中学校から)、松尾史子調査員採用(京都府教育庁から)

(安藤信策)

受贈図書一覧（9．2～4）

(財)北海道埋蔵文化財センター	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第108集　中野Ｂ遺跡（Ⅱ）、同第109集　石倉貝塚、同第111集　大中山13遺跡（３）
苫小牧市埋蔵文化財調査センター	美沢東遺跡群発掘調査概要報告書Ⅳ
青森県埋蔵文化財調査センター	青森県埋蔵文化財調査報告書第186集　野尻（２）遺跡Ⅱ・野尻（３）遺跡発掘調査報告書、同第186集　野尻（４）遺跡発掘調査報告書、同第196集　洞内城跡発掘調査報告書、同第206集　高屋敷館跡遺跡発掘調査概報、同第208集　桜ヶ峰（２）遺跡、同第209集　隈無（４）遺跡、同第210集　隠川（３）遺跡、同第211集　畑内遺跡Ⅳ、同第212集　八盃久保（２）遺跡・八盃久保（３）遺跡・幸神遺跡、同第213集　石焼沢・西張（３）遺跡、同第215集　朝日山（３）遺跡、同第216集　近野遺跡Ⅴ、同第217集　宇田野（２）遺跡・宇田野（３）遺跡・草薙（３）遺跡、同第218集　轡（２）遺跡、同第220集　小沢館跡、同第222集　幸畑(10)遺跡・幸畑（６）遺跡・幸畑（３）遺跡、同第223集　松館遺跡、同第224集　十三湊遺跡Ⅱ、同第225集　十三湊遺跡、同第226集　琴湖岳（２）遺跡
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第225集　大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第230集　沢田・仙人東遺跡発掘調査報告書、同第231集　長倉Ⅳ遺跡・長倉Ⅴ遺跡発掘調査報告書、同第232集　耳取Ⅰ遺跡Ａ地区発掘調査報告書、同第233集　峠山牧場Ⅰ遺跡Ｂ地区範囲確認調査報告書、同第234集　尾呂部Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第235集　岩脇遺跡発掘調査報告書、同第236集　横町遺跡発掘調査報告書、同第237集　江川鉄山跡発掘調査報告書、同第238集　ゴッソー遺跡発掘調査報告書、同第239集　寺久保遺跡発掘調査報告書、同第240集　鳩岡崎上の台遺跡発掘調査報告書、同第241集　牧田貝塚発掘調査報告書、同第242集　柏山館跡発掘調査報告書、同第243集　龍ヶ馬場遺跡発掘調査報告書、同第244集　小幅遺跡第２次発掘調査報告書、同第245集　日詰七久保遺跡発掘調査報告書、同第246集　岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成７年度分）、紀要　ⅩⅥ（平成７年度）
(財)福島県文化センター	福島県文化財調査報告書第317集　勝利ヶ岡遺跡、同第318集　弓手原Ａ遺跡（第１次）、同第320集　獅子内遺跡第１次、同第326集　相馬開発関連遺跡発掘調査報告Ⅳ、同第329集　大猿田遺跡１次調査、同第330集　常磐自動車道遺跡調査報告８、同第331集　常磐自動車道遺跡調査報告９
(財)茨城県教育財団	茨城県教育財団文化財調査報告第113集　中下根遺跡・西ノ原遺跡・隼人山遺跡、同第114集　前原遺跡・大門通遺跡・三本松遺跡、同第115集　沢田遺跡、同第116集　前田村遺跡Ｃ・Ｄ・Ｅ区、同第117集　長者屋敷遺跡、同第118集　宮前遺跡、同第119集　根崎遺跡・西栗山遺跡、同第120集　熊の山遺跡、同第121集　神田遺跡、同第122集　半田原遺跡、遺跡が語る茨城の歴史
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団年報15、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第173集　白倉下原・天引向原遺跡Ⅲ、同第176集　新保田中村前遺跡Ⅳ、同第181集　波志江今宮遺跡、同第182集　飯土井上組遺跡・波志江中峰岸遺跡、同第191集　箱田古市前Ⅰ・Ⅱ遺跡、同第199集　中沢平賀界戸遺跡、同第200集　中江田ハツ縄遺跡、同第203集　荒砥上ノ坊遺跡Ⅱ、同第208集　元総社寺田遺跡Ⅲ、同第212集　吹屋瓜田遺跡、同第218集　中宿在家遺跡・上豊岡一里塚遺跡《写真図版》
(財)千葉市文化財調査協会	(財)千葉市文化財調査協会年報４～７、土気南遺跡群Ⅰ～Ⅳ、千葉市文化財報告書第10集　谷津遺跡　図版編、砂子遺跡（Ｃ区）、熊ノ台西遺跡、小中台遺跡平成２年度発掘調査報告書、狐塚西遺跡、稲荷台遺跡、砂子遺跡（Ｄ区）、神門遺跡、平川町向エ遺跡第２次調査報告書、立山城跡、枯木台遺跡、芳賀輪遺跡、長堀東遺跡、千葉中央ゴルフ場遺跡群発掘調査報告書、永作北遺跡、上深見沢遺跡発掘調査報告書、芳賀輪遺跡　平成３年度調査報告書、若郷遺跡　平成３年度調査報告書、上鶴牧遺跡　平成５年度発掘調査報告書、福寿院遺跡、芳賀輪遺跡　平成４年度調査報告書、蛤谷津上遺跡、根崎遺跡（Ⅰ地区）平成６年度発掘調査報告書、山王遺跡、松ヶ丘遺跡
(財)山武郡市文化財センター	(財)山武郡市文化財センター発掘調査報告書第25集　油井古塚原遺跡、大網山田台遺跡群Ⅰ
(財)印旛郡市文化財センター	(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第90集　白池台遺跡・西御門荒生遺跡Ａ地区・西御門荒生遺跡Ｂ地区、同第95集　油作１－Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第106集　南囲護台遺跡（第１地点）、同第113集　佐倉城跡、同第114集　平賀細町遺跡、同第115集　野毛平泉台遺跡発掘調査報告書、同第118集　米ヶ峠遺跡、同第121集　上本佐倉上宿遺跡、同第129集　新橋高松遺跡

(財)東総文化財センター	(財)東総文化財センター発掘調査報告書第３集　仲有戸遺跡・佐野原北遺跡・荒野台遺跡・粟島台遺跡、同第４集　新農遺跡、同第６集　岩井安町遺跡、同第10集　坊ノ場遺跡、同第12集　蛇園猪鹿々野遺跡
(財)市原市文化財センター	第11回　市原市文化財センター遺跡発表会要旨、同第12回、市原市文化財センター年報平成４年度、同平成５年度
(財)東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター	東京都埋蔵文化財センター調査報告第35集　多摩ニュータウン遺跡　No.457遺跡、同第40集　尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅱ
(財)かながわ考古学財団	かながわ考古学財団調査報告10　宮ヶ瀬遺跡群Ⅷ、同11　池子遺跡群Ⅲ、同12　長津田遺跡群Ⅱ、同13　本入こざっ原遺跡、同報告23　小南遺跡(No.28)・東北久保・鳥居松遺跡(No.29)、研究紀要１、神奈川県立埋蔵文化財センター年報15
(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター	港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告20　C18横穴・矢崎山古墳、同21　老馬遺跡、(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター年報６、六浦大道やぐら群発掘調査報告、畳屋の上遺跡・西谷戸の上遺跡・北川貝塚南遺跡
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター	(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要　第５輯
(財)滋賀県文化財保護協会	紀要　第９号、第13回企画展　縄文カタログ、第８回埋蔵文化財調査研究会シンポジウム「低湿地集落の実態」
(財)栗東町文化体育振興事業団	栗東町埋蔵文化財発掘調査　1995年度年報
(財)大阪府文化財調査研究センター	大阪文化財センター考古学ブックス２　大阪考古学文献目録、同３　改定増補　醉古雑録、河内平野遺跡群の動態Ⅰ、(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第58輯　水込遺跡、同第82輯　中開遺跡Ⅲ・上町東遺跡、同第88輯　棚原遺跡、同第89輯　末廣遺跡・中開遺跡・松原遺跡、同第90輯　陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ、大庭寺遺跡Ⅱ・伏尾遺跡Ⅰ、清堂遺跡、丹上遺跡(その８)、福田遺跡、池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅸ～ⅩⅥ、巨摩・若江北遺跡発掘調査報告第４次、大阪文化財研究　第７～10号、研究紀要vol.２、大坂城発掘調査概要７～11、(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第２集　新家遺跡第６次発掘調査報告書、同第４集　粟生岩阪遺跡、同第５集　久宝寺遺跡・竜華地区試掘調査報告書、同第６集　久宝寺遺跡・竜華地区(その１)発掘調査報告書、摂河泉発掘資料精選、考古学から災害と復興を考える、大阪府立弥生文化博物館平成８年度冬季企画展図録　発掘速報展大阪'96、日根荘総合調査報告書、史跡池上曽根95、第35回大阪府下埋蔵文化財研究会資料集、新金岡更池遺跡、大阪府文化財調査研究センター年報１
岡山県古代吉備文化財センター	岡山県埋蔵文化財報告27、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告115　前山遺跡・鎌戸原遺跡、同117　小中遺跡・白逧古墳群・小中古墳群・湯ヶ逧古墳、同118　寺山古墳群・大日幡山城出丸跡、同119　百間川兼基遺跡３・百間川今谷遺跡３・百間川沢田遺跡４、同122　下笠加遺跡
(財)香川県埋蔵文化財調査センター	龍川五条遺跡Ⅰ、空港跡地遺跡(Ｊ地区)、空港跡地遺跡Ⅰ、郡家田代遺跡、中間西井坪遺跡Ⅰ、川津一ノ又遺跡Ⅰ
(財)広島市歴史科学教育事業団	(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書第18集　広島城外堀跡城北駅北交差点地点発掘調査報告、同第19集　寺山遺跡発掘調査報告、同第20集　番谷遺跡発掘調査報告、第19回文化財展　美しさの考古学、平成７年度考古学教室記録集「埴輪作り体験」、平成８年度考古学教室記録集「石器づくり」
(財)東広島市教育文化振興事業団文化財センター	文化財センター調査報告書第６冊　山崎１号遺跡発掘調査報告書、同第12冊　安芸国分寺東方遺跡発掘調査報告書
福岡市埋蔵文化財センター	福岡市埋蔵文化財センター年報第15号　平成７(1995)年度
深川市教育委員会	深川市文化財調査報告７　内園６遺跡Ⅱ、同８　東納内遺跡
岩手県教育委員会	岩手県文化財調査報告第98集　岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成７年度)
郡山市教育委員会	大根畑遺跡第４次調査報告、影遺跡、桐ノ木沢遺跡、清水台遺跡第15次Ａ地点調査報告、咲田遺跡赤木地区第１次調査報告、桃見台遺跡第２次調査報告書、安倍遺跡第１次調査報告書、郡山東部15　石橋Ａ遺跡・石橋遺跡・夢田遺跡(第３次)、同16　岩ヶ作遺跡・妙音寺遺跡(第１次)、同17　屋敷添遺跡・浜井場経塚・浜井場Ａ遺跡・浜井場Ｂ遺跡・塚遺跡・屋戸遺跡、南山田遺跡　第一冊、城山館遺跡、鴨打Ａ遺跡　第一冊(遺構編)、広畑遺跡、割田Ｂ遺跡、二池遺跡(Ⅱ・Ⅲ区)第２次調査報告、二池遺跡(Ⅴ区)第３次調査報告、郡山市二池遺跡出土耐火物・砂鉄および鉄滓、木村館跡(Ⅶ・Ⅷ区)第３次調査報告、東山田遺跡第１次調査報告、上之内遺跡、遠後遺跡、大安場古墳群測量調査報告書、郡山市埋蔵文化財分布調査報告１、同２
栃木県教育委員会	栃木県埋蔵文化財調査報告第175集　宮の内Ａ遺跡・宮の内Ｂ遺跡、同第178集　西赤堀遺

	跡、同第181集　八幡根東遺跡、同第184集　中之内遺跡・塙Ａ遺跡・松原北遺跡・三番組遺跡
前橋市教育委員会	中二子古墳、内堀遺跡群Ⅶ、大屋敷遺跡Ⅳ、西田遺跡、屋敷Ⅱ遺跡、平成７年度　市内遺跡発掘調査報告書
志木市教育委員会	志木市の文化財第24集 城山遺跡第12地点・城山遺跡第13地点・西原大塚遺跡第14地点 他
千葉市教育委員会	埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成８年度
日野市教育委員会	日野市埋蔵文化財発掘調査報告29　日野市埋蔵文化財発掘調査輯報Ⅷ、同報告34　南広間地遺跡６、同35 南広間地遺跡７、同36 南広間地遺跡８、同37 南広間地遺跡第28次調査、同39 田中タダによる共同住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
昭和町教育委員会	昭和町のかすみ堤
茅野市教育委員会	小堂見遺跡、北山菖蒲沢Ａ遺跡、新井下遺跡、永明寺遺跡、北山菖蒲沢Ｂ遺跡、梵天原遺跡、菖蒲沢Ａ遺跡、特別史跡 尖石遺跡
伊那市教育委員会	小黒南原遺跡、辻西幅遺跡
婦中町教育委員会	中名Ⅱ遺跡発掘調査報告
多治見市教育委員会	多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書　平成５・６・７年度、虎渓山１号古墳発掘調査報告書、多治見市文化財保護センター研究紀要第２号、西坂遺跡Ｂ地点(第Ⅱ次)発掘調査報告書
美濃市教育委員会	美濃市文化財調査報告第８号 南山遺跡、同第９号 段遺跡、同第10号 改田遺跡
静岡市教育委員会	ふちゅ～るNo. 3　平成５年度静岡市文化財年報、同No. 4　平成６年度静岡市文化財年報、静岡市埋蔵文化財調査報告33 平城遺跡・平城古墳群２
稲沢市教育委員会	稲沢市文化財調査報告ＸＬＶ 稲沢市内遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)
長久手町教育委員会	岩作城跡発掘調査概要報告書
草津市教育委員会	平成６年度草津市文化財年報
中主町教育委員会	中主町文化財調査報告書第４集　光明寺遺跡第７次発掘調査報告書、同第５集　昭和60年度中主町内遺跡発掘調査年報、同第14集　県道荒見・上野近江八幡線単独道路改良工事(木部・八夫工区)に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書、同第24集　中主町内古文書目録(社寺編１)、同第45集　平成６年度中主町埋蔵文化財発掘調査集報Ⅰ、同第46集　近江国野洲郡安治区有文書目録、同第48集 中主町のすまい
愛東町教育委員会	愛東町文化財調査報告第３集　愛東町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ、同第４集　百済寺跡分布調査報告書Ⅰ、同第５集　愛東町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ、同第６集　愛東町内遺跡発掘調査報告書Ⅲ
今津町教育委員会	町内遺跡発掘調査概要報告書
泉南市教育委員会	第９回歴史の華ひらく泉南シンポジウム　弥生文化の成立、泉南市遺跡群発掘調査報告書ＸⅢ 泉南市文化財調査報告書第二十九集
藤井寺市教育委員会	藤井寺の遺跡ガイドブックNo. 8　国府遺跡の謎を解く
大阪狭山市教育委員会	大阪狭山市文化財調査報告書15 大阪狭山市内遺跡群発掘調査概要報告書７
加西市教育委員会	加西市埋蔵文化財調査報告23 長塚遺跡Ⅰ
一宮町教育委員会	一宮町文化財調査報告９　安積山遺跡
新宮町教育委員会	町史よもやま話
岡山市教育委員会	岡山市埋蔵文化財調査の概要 1995年度
山口市教育委員会	山口市埋蔵文化財調査報告第51集　初瀬遺跡、同第59集　山口市内遺跡詳細分布調査(宮野地区)
宗像市教育委員会	冨地原神屋崎　宗像市文化財調査報告書第41集、宗像市文化財ガイドブック　宗像の歴史散歩、宗像市内遺跡等分布地図
津屋崎町教育委員会	津屋崎町文化財調査報告書第11集 在自遺跡群Ⅲ
志免町教育委員会	方ヶ島遺跡 志免町文化財調査報告書第７集
小石原村教育委員会	一本杉２号古窯跡 小石原村文化財調査報告書第７集
佐賀県教育委員会	佐賀県文化財調査報告書第118集　黒谷・水呑古墳群、同第125集　東山田一本杉遺跡、同第129集 内野山北窯跡
高城町教育委員会	高城町文化財調査報告書第５集 雁寺第２遺跡・山城第１遺跡
香々地町教育委員会	香々地町文化財調査報告書第２集 香々地町の文化財Ⅱ
上高津貝塚ふるさと歴史の広場	埋蔵銭の物語
栃木県立なす風土記の丘資料館	栃木県立なす風土記の丘資料館年報第４号(平成７年度)
浦和市立郷土博物館	浦和市博物館研究調査報告書 第24集

国立歴史民俗博物館	倭国乱る、国立歴史民俗博物館研究年報４(1995年度)
千葉県立房総風土記の丘	千葉県立房総風土記の丘年報19
千葉市立加曽利貝塚博物館	貝塚博物館紀要 第24号
出光美術館	出光美術館 館報第97号
調布市郷土博物館	調布市埋蔵文化財調査報告32　調布市深大寺城山遺跡
世田谷区立郷土資料館	これは何でしょうぱあと２
(財)府中市文化振興財団	府中市郷土の森紀要 第10号
塩尻市立平出遺跡考古博物館	平出博物館ノート10　中世の戦・近世の騒動、平出博物館紀要　第13集、洗馬焼・和兵衛窯跡
氷見市立博物館	氷見の絵馬展Ⅱ
石川県立歴史博物館	甲冑・鐙・刀装具
三方町立郷土資料館	三方町文化財調査報告書第14集 ユリ遺跡
静岡市立登呂博物館	祖父母から孫に伝えたい焼畑の暮らし
浜松市博物館	浜松市博物館報Ⅸ、浜松市博物館資料集６ 所蔵考古資料撰
斎宮歴史博物館	史跡斎宮跡 平成７年度発掘調査概報、眠りから覚めた文字たち
大津市歴史博物館	大津市歴史博物館研究紀要４
大阪府立近つ飛鳥博物館	平成９年度春季特別展 まつるかたち、大阪府立近つ飛鳥博物館 館報２
吹田市立博物館	吹田市五反島遺跡発掘調査報告書
播磨市郷土資料館	館報 平成８年度
橿原市千塚資料館	平成８年度特別展 よみがえった生活用具Ⅱ
島根県立八雲立つ風土記の丘資料館	プレ古代出雲文化展 サイエンスロマン“ＩＺＵＭＯ”
東北学院大学学術研究会	東北学院大学論集－歴史学・地理学－第29号
山形史学会	山形大学史学論集 第17号
筑波大学歴史・人類学系	筑波大学 先史学・考古学研究第８号
立正大学熊谷校地遺跡調査室	遺跡調査室年報Ⅷ、Ⅸ
立教大学学芸員過程研究室	Mouseion 24
國學院大學考古学資料館	國學院大學考古学資料館紀要 樋口清之博士米寿記念 第13輯
東海大学史学会	東海史學 第31号
金沢大学文学部考古学研究室	金沢大学考古学紀要 第23号
愛知学院大学文学会	愛知学院大学論叢 文学部紀要第29号
南山大学遺跡調査保存会	南山大学大学院考古学研究報告第２冊 高塚古墳、同第３冊 姥子古窯跡、同第５冊 愛知県・岐阜県内古墳出土馬具の研究、同第６冊 1994・1995年度博士過程修士論文
愛知大学文学部史学科	愛大史学－日本史・アジア史・地理学－第６号
名古屋大学年代測定資料研究センター	名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(Ⅷ)
滋賀県立大学人間文化学部	人間文化１号　滋賀県立大学人間文化学部研究報告１号、平成８年度　琵琶湖文化論実習報告書
大谷女子大学資料館	貝塚寺内町遺跡 大谷女子大学資料館報告書第34冊、四天王寺 同第37冊
大阪大学文学部	待兼山論叢 第30号
大手前女子大学	大手前女子大学論集 第30号
関西学院大学文学部史学科	関西学院史学 第24号
奈良大学図書館	奈良大学紀要 第25号
島根大学埋蔵文化財調査研究センター	島根大学埋蔵文化財調査研究報告第１冊 島根大学構内遺跡第１次調査(橋縄手地区１)
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊 鹿田遺跡４、同第12冊 津島岡大遺跡８
岡山理科大学図書館	自然科学研究所研究報告 第22号
宮城県多賀城跡調査研究所	第23回 古代城柵官衙遺跡検討会資料
(株)メル プランニング	＜グラフィティ・日本謎事典⑤＞ 平安1,200YEARS AGO
(株)新人物往来社	別冊歴史読本８ 記紀神話の秘密
国立国会図書館	日本全国書誌 第８号(通号2116号)、同第10号(通号2118号)、同第15号(通号2123号)
宮内庁書陵部	書陵部紀要 第48号
府中市埋蔵文化財整理事務所	府中市埋蔵文化財調査報告第14集　武蔵国府関連遺跡調査報告14、同第15集　武蔵国府関連遺跡調査報告15

板橋区四葉遺跡調査会	板橋区四葉遺跡調査報告Ⅴ　四葉地区遺跡【旧石器時代編】平成８年度、四葉地区遺跡平成８年度年報
(財)韓国文化研究振興財団	青丘学術論集 第10集
遺跡発掘調査団	天王原遺跡発掘調査報告書第Ⅲ地点、相模原市No.62遺跡発掘調査報告書、秦野市No.19寺山遺跡発掘調査報告書
富山市日本海文化研究所	富山市日本海文化研究所紀要第十号 高岡魚問屋石川家文書目録
嬉野町遺跡調査会	野田遺跡発掘調査報告、片部遺跡への招待、墨書文字発見と四世紀の日本
(財)古代學協會	古代文化 第49巻第２～４号
池上曽根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会	池上曽根遺跡シンポジウム２、弥生の環濠都市と巨大神殿
姫路市立城郭研究室	城郭研究室年報 第６号
埋蔵文化財天理教調査団	考古学調査研究中間報告19 布留遺跡布留(西小路)地区古墳時代の遺構と遺物
朝鮮学会	朝鮮学報 第161、162輯
宮内庁正倉院事務所	正倉院紀要 第19号
奈良国立文化財研究所	奈良国立文化財研究所史料第42冊 平城宮木簡五、同解説
奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター	文部省科学研究費補助金重点領域研究『遺跡探査』第５回研究成果検討会議論文集
(財)京都市埋蔵文化財研究所	京都嵯峨野の遺跡　京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊、特別史跡特別名勝　鹿苑寺(金閣寺)庭園防災防犯施設工事に伴う発掘調査 同第15冊
(財)長岡京市埋蔵文化財センター	長岡京市埋蔵文化財調査報告書第８集　長岡京跡右京第544次今里遺跡発掘調査報告書、同第９集 長岡京跡右京第548次調査概要
京都市文化市民局	京都市の文化財 第14集
弥栄町教育委員会	京都府弥栄町文化財調査報告第10集　愛宕神社古墳群(堤城跡)第１次発掘調査報告書、同第11集 奈具岡南１号墳発掘調査報告書
宮津市教育委員会	宮津市史 史料編第二巻
大山崎町教育委員会	大山崎町文化財年報 平成７年度、大山崎町の発掘 大山崎町埋蔵文化財調査報告書第14集
八幡市教育委員会	ほ場整備事業地内遺跡第３次発掘調査概報　八幡市埋蔵文化財発掘調査概報第19集、出垣内遺跡第２次発掘調査概報 同第20集
京都府京都文化博物館	京都文化博物館研究報告第９集　平安京左京四条四坊四町、同第12集　宮ノ口遺跡第２次発掘調査
亀岡市文化資料館	第22回企画展展示図録 昔の道具たち
宇治市歴史資料館	宇治文庫８　宇治猿楽と離宮祭
城陽市歴史民俗資料館	城陽市歴史民俗資料館館報第２号、春季企画展 青谷梅林と奈良鉄道
佛教大学総合研究所	佛教大学総合研究所紀要 第４号
京都橘女子大学	京都橘女子大学研究紀要 第23号
花園大学考古学研究室	花大研究報告10 黄金塚２号墳の研究
大野左千夫	和歌山市立博物館研究紀要11
関口功一	古代史研究第10～12号、東国史論第９～11号
辰巳和弘	「黄泉の国」の考古学
丸山哲夫	石巻文化財 第９号
水野正好	1995年度奈良大学文学部文化財学科 海外研修旅行報告
森島康雄	第３回京阪・歴史アウティング

編集後記

情報64号が完成しましたのでお届けします。

本号は、今年度の最初の情報ですので、今年度の事業予定と、昨年度の調査概要を掲載しました。また、本号には、中国徐州博物館の李銀徳氏・孟強氏のご厚意により、近年、発掘された前漢の劉執墓出土の人物画像鏡についての訳文を掲載することができました。訳していただいた黄暁芬氏をはじめ、関係方々のご努力に感謝申し上げます。

また、誌上遺物展示の第１回として、高山12号墳の双龍環頭大刀を選んでみました。この遺物は、本誌第60号から裏表紙でご覧いただいています当センターのシンボル・マークのモチーフとなったものです。原物との違いは、シンボルには「京」の字が隠されています。

（編集担当＝土橋　誠）

京都府埋蔵文化財情報 第64号

平成９年６月26日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617　向日市寺戸町南垣内40番の３
Phone（075）933-3877（代）

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone（075）256-0961（代）

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER